
遊戯王 G X 強制転生日記

蒼影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX 強制転生日記

【Nコード】

N9360P

【作者名】

蒼影

【あらすじ】

神と名乗るジジイによって転生させられた主人公。

転生先はGXの世界。

大量のカードと大量の精霊で送る（強制的な）転生の日々が始まった。

ターノ 『これって転生ってやつ?』 (前書き)

リリカルが終わってないのに書きました。

リリカルが優先なのでこちらの更新は遅めです。

それではどうぞ！

5 / 29 一部表現修正

ターン0 『これって転生ってやつ?』

突然な質問だが、皆は『転生』と言うのは知っているだろうか？

二次小説なんかでよくある突然神と名乗る人物が現れて、「突然ですが、あなたは死にました。」とか言ってきてアニメやゲームの世界へ送るあの転生だ。

この俺、みねぎしはるき峰岸春樹今まさにその転生を体験したばかりなのだ。

現在俺は新しい両親に見られながらスーパー赤ちゃんタイムの真っ最中なのだ。

(まさか……あのジジイの話が本当だったとは……)

・・・約2時間とちよつと前・・・

「突然ですが、あなたは死にました。」

「……は?」

これが俺とジジイの最初の出会いだった

「……悪い、爺さん。どうやら俺の耳はおかしくなったらしい……今死んだ」って聞こえたんだが？もう一度言ってくれるか？」

「その年で耳が悪いのか？ならもう一度言おう……お前は死んだ。」

「うえええええい！！！」

ゴシャア！！！！

「ツバクカンサルマ！！！」

今ジジイが意味のわからない言葉を吐きながら吹っ飛んでいった
なぜなら、俺が放った某仮面なライダーに引けを取らないとび蹴りが
ジジイの顔面を抉ったからだ。

「いきなり何をするんじゃあ！？」

「お前が訳の分からないことを言うからだろうが！なんだ死んだって！？死ね！お前が死ね！いつそ砕け散れ！」

「顔面に蹴り入れた上に砕け散れは無いんじゃないかのう？……とり

あえず落ち着いてくれんかのう……今説明するから」

「おう、納得いく説明を頼むぞ。じゃなきゃ今度は１７分割してやる。」

俺はどこからかナイフを取り出してジジイに言う

「リヨウカイデス」

〃〃説明中……しばらくお待ちください〃〃

「つまり、お前が担当をしていた見習いの神様がミスって俺が死んでしまったと？で、生き返らせることはできないから、そのお詫びに違う世界へ転生させてやろうというわけだな？」

「まあ、そんな感じじゃな……ちなみに転生させる世界は決まっておるぞ。お前の好きな『遊戯王GX』の世界じゃ！嬉しいかろう？。」

「嬉しいわけあるか！？やっぱり１７分割してやろうか！クソジジイ！！！」

「フオ！？なぜ！？だからどこから出したんじゃそのナイフ！？」

ジジイがニコニコしながら俺がここに入る経緯を話しているのが何とも腹立たしいので俺はナイフを持って般若の如くジジイに歩み寄る

「…で？俺にはなんか特典あんのか？」

「は？特典？」

「こういう場合なんか特典あんだろ！？」

「遊戯王の世界で特典なんか付けてどうするんじゃ？チートな身体能力持ってリアリストにでもなるのか？」

リアリストとはデュエルで物事を解決する遊戯王の世界であえて腕力や暴力で物事を解決する人の事だよ」

「そついやそうか……じゃあカードくれ！大量のカード！」

「まあ、あの世界ではカードは多くても困らんからのう…あい分かった、要求の大量のカードはお主がデュエルアカデミアに入学する1週間前に送つというやろう」

「よろしく。」

「あと、お前には大量の精霊がつくと思うから覚悟しておくんじやのう…」

「は？…おいちょっと待て、それはどういうこと……」

俺が言い終わる前に俺の足元の床が無くなった

「だあああああああああ！！！！！！！！！！」

「頑張るんじゃぞ」

ジジイが白いハンカチをヒラヒラ振っているのがチラッと見え殺意が沸いた

ぜってえ3枚におろす！！

・・・回想終わって現在・・・

…思い出したら腹立ってきた…しかし転生って言うだけあるな、ま

さか赤ん坊からやり直しとは……

両親と思われる男女がしきりに俺の名前を呼んでいる

はあ…遊戯王か…嬉しいような悲しいような…

こうして俺の第2の人生が（強制的に）始まった。

ターンの『こねって転生ってやつ?』(後書き)

いかがだったでしょうか？

感想、ご指摘お待ちしております。

ターン1 『これが入学試験ってやつ?』 (前書き)

連続投稿になるのかな?さすがにオープニングだけじゃあれだし…

それではどうぞ!

ターン1 『これが入学試験ってやつ?』

「はあ、今日か…デュエルアカデミアの実技試験…」

私服を着て、首に青のヘッドフォンをかけている俺……峰岸春樹改め、如月きさらぎ 凰雅おうが

俺が自分の名前を聞いて思ったことを素直に言つと……何この厨二病な名前?

凰雅ってなに?なんでそんな名前付けたの!?

見た目とギャップがありすぎて似合わねえよ!?

ちなみに俺の見た目ははつきり言つてしまえば某アブノーマル異常な生徒会長のマンガに出てくるあの……球磨川楔まんまである。

どういわけかいくら筋トレしても体形が変わらなかった…筋肉はついてるようだが…

ただ、その球磨川楔とは決定的に違う部分がある。それは…

『ア』『ホ』『毛』である!

そう、どこかの腹ペコ王のように頭頂部の辺りにピコピコとアホ毛があるのである。

ただ、それほど目立つわけではない、長さもせいぜい1〜2cmくらいなのだが

容姿のものを知ってる俺にしてみればものすごく違和感があるのだ。

「はあ…鬱だ…死の　いつまで現実逃避しているんだい？ 凰雅。
……現実逃避の原因の2割はお前のせいだと自覚してくれ…ユベル
(・・・)」

俺の左斜め後ろから男なのか女なのかよく分からない体の人物が俺に声をかけてくる

一般人の違いは上に上げた通り男なのか女なのかよく分からない体つきに皮膚？の色が白？と黒？に2色に分かれている。10人中10人はこいつを普通の人間とは言わない。

そう、こいつの名はユベル。この世界では遊戯十代の精霊であり、この世界のヤンデレキャラと言われた奴だ。

なぜかこいつ『等』が1週間前、ジジイが寄越したカードから出てきた。

あのジジイ絶対殺す！

神様に殺意を燃やすのはいいけど、神様だって言っただけじゃないか
『おまえには大量の精霊がつくと思うから覚悟しておくんじゃ…』
つてぞ……

だからと言ってもお前が来るか？お前は十代の精霊だろう？

今俺とユベルは某魔砲少女に出てくる念話もどきで会話している

遊戯十代の僕と僕は同じであって違う存在だよ。実際遊戯十代の僕はヤンデレ…だっけ？それが悪化中

うわぁ…想像したくねえ…

だから、鳳雅も僕を受け入れないと僕もヤンデレになっちゃうよ？

さらっと恐ろしいこと言っな！

マスター…もうすぐ呼ばれる……

ほらほら、鳳雅！早く行こうよ！

マナ！鳳雅殿もマスターなのだからちゃんと敬語をだな……

「はあ~~~~~」

俺の右斜め後ろから3つの念話が聞こえる

1人目は水色の髪にローブに杖を持って「私は魔法使いです」って主張する格好の少女…

2人目は1人目の少女より背が高くピンクと青の服？法衣？を着ていて「私は魔女っ娘です！」と言い張っているような格好の少女

3人目は2人目と似たような紫色の服？法衣？を着た男性

はい。分かる人は分かりますね。上から水霊使いエリア、ブラック・マジシャン・ガール、ブラックマジシャンです。本当に（ry

こいつらもユベルと同様送られてきたカードから出てきた。

って言うかマナとマハードは遊戯の精霊だろう？ユベルにも言ったがなんで俺のところに居るんだ？

そう、ぶっちゃけこのブラマジ師弟はあの決闘王…武藤遊戯の精霊なのだ。なのに…なぜか俺のところに居る

マスターのところで今、鳳雅のところに居る私達はおんなじ存在だよ。分身みたいなものかな？ニンニン♪

魔女っ娘がニンニンって……違和感バリバリだな……それとマハ
ード。マナには言っても聞かない。諦める。

しかし、凰雅殿……

別に気にしてないから……ついでに俺は出会って30分で色々諦め
た

……分かりました。マナ、凰雅殿にちゃんと礼を言っただぞ。

は……い！ありがとう！凰雅！

精霊4人って疲れるな……

クイクイ……

ん？どうしたエリア？

突然エリアが俺の服を引っ張ってきた

マスタ…次マスターの番…

見てみると俺の前の生徒のデュエルは終わっていた

分かった…ありがとう、エリア。

ん……

何だろう…エリアは口数が少ないけどなんか癒される……

《受験番号8番。如月鳳雅さん、実技試験の準備が整いましたので、決闘場に上がってください。》

「俺の番か…デッキは…ああ…これか…」

たしかそれは鳳雅が3日前に組んだデッキだね

え？あのデッキ！？

………相手が気の毒……

そう今デュエルディスクにセットされているデッキはジジィからもらったカードをフルに使って組んだデッキだ

ジジィの奴…気前のいいことに俺が生きていた時のOCG最新カード+ゲームの中のゲームオリジナルカード全種って…この時だけジジィに少し感謝した。

しかも全部9枚ずつ…

当然というか何と言うか…シンクロにダークシンクロ…さらにゲームオリジナルもあった。それに三幻神とか三邪神とか三幻魔とか地縛神とか機皇帝とか…ヤベエ…星界の三極神もあったよ…ヤベエよこれ……

…他にも色々おまけはあったが…精霊とか、精霊とか、精霊とか、精霊とか…!!

考えているうちに場に上がっていたようだ

相手は普通？のアカデミアの教員だった。

なぜかアカデミアの一般の教師はサングラスをしている……なぜ？

「君が受験番号8番だね？」

「はい。受験番号8番、如月凰雅です。」

「如月君……君のそのデュエルディスクは？」

「これですか？別に検査で問題はありませんでしたよ？」

「そうか…ならいいんだ。」

俺のデュエルディスクは他の人のディスクとは違う。

ぶつちやけ俺のディスクは蟹……じゃない不動遊星のディスクだ

もちろん、あのジジイがカードと一緒に送ってきた。

オートシャッフル、カードサーチ機能まで付いている……便利すぎる。さすが神様ばうわあ……

「では……」

「「^{デュエル}決闘……」」

試験官 LP4000

凰雅 LP4000

「先行は私が貰う。私のターン、ドロー！」

前から思っていたんだが先攻、後攻が早い者勝ちってよく口論にならないな……

「私は『ゴブリン突撃部隊』を召喚！」

ゴブリン突撃部隊 ATK2300

「さらにカードを1枚伏せて、ターンエンド。」

試験官 LP4000 手札4

モンスター ゴブリン突撃部隊

魔法・罫 伏せ1枚

「俺のターン、ドロー。……何だこれ？」

「どうした？手札事故か？」

「いえ、何でもありません……」

事故って言うよりこれは……

「俺はフィールド魔法、『ギア・タウン歯車街』を発動、さらにカードを2枚伏せ、『大嵐』を発動！お互いの魔法・罠カードをすべて破壊！」

「なに！？それでは君のカードも！」

フィールドに突風が吹き荒れフィールドのカードが吹き飛ばされていく

…悪いなクロノス…二番煎じになってしまっな……

「歯車街が破壊されたことでデッキから『アンティーク・ギアガジェルドラゴン古代の機械巨竜』を特殊召喚！」

古代の機械巨竜 ATK3000

「攻撃力3000だと!？」

「さらに墓地の『黄金の邪神像』の効果発動！セットされているこのカードがカードの効果で破壊された時、自分フィールドに邪神像トークンを1体特殊召喚する。伏せていた邪神像は2枚……よって2体の邪神トークンが特殊召喚される！」

邪神トークン×2

「一気に3体のモンスターを……」

「さらに2体の邪神トークンを生贄に、『古代の機械巨人』アンティーク・ギアゴレムを召喚！」

古代の機械巨人 ATK3000

「攻撃力3000が2体……」

試験官は顔を青くしている…別にこれくらい普通じゃねえ？

「さらに速攻魔法『リミッター解除』を発動。俺の場の機械族モンスターはこのターンのエンドフェイズまで攻撃力は2倍になる。ただし、エンドフェイズにこの効果を受けたモンスターは自壊する。」

古代の機械巨竜 ATK3000 ↓ 6000

古代の機械巨人 ATK3000 ↓ 6000

「あ…ああ……」

「バトル！『古代の機械巨人』で『ゴブリン突撃部隊』を攻撃！続けて『古代の機械巨竜』でダイレクトアタック！」

「うわあああああー！」

試験官 LP4000 - 3700 = 300 - 6000 = 3000 = - 5700

はい。ワンターンキル成功……

と言っか半分ワンキルの為のデツキなんだがな……

「ありがとうございました。」

俺はさっさとその場を後にした

・
・
・
・
・

・
・
・

・

俺がさっきまでいた場所に戻ると

「君、さっきはすごかったな。」

突然俺より少し背の高い青年に声をかけられた……こいつは三沢大地か……後々『^{エアーマン}空気男』とか言われる……

「君は確か……受験番号1番の……」

「ああ、三沢大地だ。君は確か……」

「如月鳳雅だ。如月でも鳳雅でも好きに呼んでくれ。俺もお前の事を好きに呼ぶ。」

「じゃあ如月と呼ばせてもらっ……しかしワンターンキルとは……思い切ったことをするな」

「別に…そう言うデッキを組んだだけだ……見るか？」

「いいのかい？君のデッキだろう？」

「構わない。今回の試験のためだけに組んだデッキだ。クセは強いがよく回ってくれた。この後崩してもう少しちゃんとしたデッキにするつもりだし」

「そ、そうなのか？じゃあ見せてもらおうよ」

そう言う三沢はデッキを眺め始めた

「随分考えて組んであるじゃないか、このままでも十分じゃないのか？」

「確かにそうなんだが、そいつは大抵、ワンキルが決まってしまうから面白くない。だから崩す。」

「じゃあ君は試験なのに本命のデッキは使わなかったのか？」

「ああ…このデッキでも問題なく勝てると思ってたしな」

その言葉を聞いて三沢の顔が若干引き攣っている

「さて、それじゃ俺は帰る。」

俺は三沢から返されたデッキをしまい出口へ向かう

「見ていかないのか？」

「興味無い。試験の結果は郵送だからここに居る意味もない。それじゃ、お互い合格したらまた会おう、三沢」

「あ、ああ……」

そう言っただけで俺は後を後にした

ターン1 『これが入学試験ってやつ?』(後書き)

作者「と言う事でこの作品の主人公、如月鳳雅君です。」

鳳雅「どうも…」

作者「精霊が最初から4体もいるなんてすごい状況だね♪」

鳳雅「お前のせいだろうが!」

作者「所で今回使用したデッキは?」

鳳雅「アンティークのデッキだ。本来は後攻の時パワーボンドでアルティメットゴーレムを出してリミッタ解除でワンキルするデッキな。」

作者「決まったら鬼ですな…」

鳳雅「そう言えば!」

作者「なんだ?」

鳳雅「タグにオリカなしってあるのにゲームオリジナルはありなのか?」

作者「オリカって自分で考えたカードの事じゃないの?それにタグに『TF参考』って書いてあるじゃん?」

鳳雅「もう何も言わん…」

作者「次回の更新は10日後の1月14日です。」

鳳雅「感想、ご指摘お待ちしております。」

作者「それでは次回もお楽しみに」

鳳雅「『リリカルなのは』夜天を受け継ぐもの」もよろしく願
いします……ってここでこれ言ってもいいのか？」

作者「それも私の作品だからokじゃね？」

ターン2 「ここがデュエルアカデミアってやつ?」(前書き)

作者「更新しました。」

凰雅「意外と速かったな……」

作者「今回はね……それではどうぞ!」

ターン2 「ここがデュエルアカデミアってやつ？」

今、俺はこのデュエルアカデミアの校長の前で腕を組んで仁王立ちしているところだ

「き、如月君……笑顔が怖いんですけど……（汗）」

「どういふことが説明してもらいましょうか？校長……」

俺は右手に持った赤い制服らしき服を校長に突きつけて言う

俺がこんなことをしているのは約2時間前に遡ることになる

↓2時間前・船の上

俺は大量のケースに背を預けて、ヘッドフォンの音楽を聴いている。

俺の膝の上にはエリアが座ってる

「マスタ……誰か来た……」

「ん？」

エリアに言われ顔を向けるとみたことある男が近づいてきた。

「如月、また会ったな……」

「三沢か……」

「ところで君はまだ制服を着ていないのか？」

「ああ……そう言えばそんなのが送られてきたな……」

「そんなのって……」

「まあ……どうでもいいが……着なきゃいけないなら着るしかないか……」

ガサガサ……

「これは……」

「どういうことだ？君の成績とあのワンターンキルならブルーは無理だったとしてもイエローは確実なはずなのに……」

アカデミアから送られてきた包みを開けるとそこには赤い制服が入っていた

「どうやらアカデミアに着いたらさっそくO H A N A S I
が必要なようだな……」

「き、如月…顔は笑顔なのに物凄く怖いぞ……」

「マスタ…怖い……」

エリアも膝から離れ少しばかり震えているように見える

……と言ったことがあり、俺は島に着くなり真っ先に校長室に突撃し、冒頭の状況になったのである

「…で？なぜ俺がレッドなんです？成績を考えたらイエローでも問題ないはずですよね？」

「すまない。どうやらこちらの手違いのようなのだ。もう決定して

しまった事なので、私でもちよつと難しいんだよ……」

……これはあれか？神の策略か？絶対ジジイは腹を抱えて爆笑しているに違いない。そうに違いない、今度会ったら奴を殺す！

再開した時の台詞は

「……お前を殺す……」

で決定だ。

「はあ……じゃあいいです。別いどこでもよかったですし……」

「そうですか……」

「ただし、俺の住む部屋は一人部屋にしてくれ。確か、寮の部屋割は入学式の後だろう？」

「よく知ってますね……」

「アカデミアの案内は前もって読んでいましたし……」

「そうですか…分かりました。それくらいでしたら何とかできます。」

「それでは俺はこれで…入学式もありますし……」

「わかりました。アカデミアでの生活を頑張ってくださいね。」

校長の言葉を聞いた後俺は校長室を後にした

・
・
・
・

・
・

・

眠すぎる入学式が終わり俺はレッド寮に向かった

「これは……」

「ボロツちいですね…凰雅。」

「マナ！そう言うことを言うんじゃない！」

「はーい……ところで鳳雅、それ…重くないの？」

「持ち上げるくらいには鍛えている……」

「流石鳳雅殿だ。常に鍛練を忘れないその心意気。マナ……お前も見習うんだぞ。」

「はーい……」

そんな話を話していたら、誰かが寮から走ってきた。

茶色っぽい髪の少年に水色の紙に眼鏡をかけた少年だ

「おーい！お前も新入生か？」

「お前は？」

「俺は遊戯十代！」

「僕は丸藤翔ッス！」

まさか原作キャラと出くわすとは……

まあ三沢と会っていたし、レッドに所属になった時点でこの展開は必然か……

「十代と翔か…俺は如月凰雅。よろしく」

「如月君って、もしかして実技試験でワンターンキルを成功させた人！？」

「一応な……」

「マジで！？スゲーなお前！俺とデュエルしてくれよ！」

十代がディスクを構えて言うてくる

「悪いが今は部屋に荷物を置きに行きたいんだが…これ結構重いんだが…」

「うわゝすごい数のケースだね……」

「それに俺もお前も同じ寮なんだから焦らなくてもいつでもデュエルできるだろ？」

「それもそうか……」

「じゃあ、俺は行くぞ……」

そう言って俺はレッド寮に向かった

・
・
・
・
・

・
・

・

「はあゝ校長、一人部屋を希望したが他の部屋より広くないか？」

「良いじゃないですか！鳳雅！広くて損はありませんよ」

「マナの言つとおりだな……じゃあ俺は寝る。マハード、ユベルな

んかあつたら起してくれ。」

「別に僕だけに頼んでくれればいいのに……」

「じゃあユベル。なんかあつたら起せよ。」

「わかったよ。凰雅、任せておくれ」

ユベルって扱いやすいのか難しいのかよく分からないな……

そんなことを考えながら俺は意識を手放した

・
・
・
・
・

・
・
・

・

ドン！ドン！ドン！

突然俺は部屋のドアが連打される音で目が覚めた

「……おい、ユベル。なんかあったのか？だとしたら何で起こさなかった？」

「さっき寮生の方が歓迎会があると言ってたけど、どうせ鳳雅は行かないだろうから起こさなかったよ。今ドアを叩いてるのは十代と翔って言ったっけ？その2人が叩いてるよ。」

「はあ~~~~」

俺は今起きている出来事にため息を漏らす。

なんで入学初日からこんなに疲れるんだ？

「とりあえずユベル、お前は隠れてろ。」

「何故だい、鳳雅？」

「精霊の見える十代はお前の事知ってるんだぞ？お前の事がバレると面倒なんだよ。」

「それを言うならマハードとマナもまずいんじゃないのかい？」

「マハードとマナは遊戲の精霊だから何とか誤魔化しようがあるが、お前はどうにもならない。だから頼む。」

「しょうがないね…他ならない凰雅の頼みだし…分かったよ、十代がいる間は僕は隠れてるよ。」

「ありがとう。ユベル…」

「例には及ばないよ。僕と凰雅の仲じゃないか……」

そう言っつてユベルは姿を消した。

ユベルが消えたのを確認した後俺はいまだに連打されている扉に向かう

ガチャ……

「誰だ？俺の睡眠を邪魔する奴は？」

「うおっ！びっくりした俺だ、十代だ。」

「なんだ十代？俺に何か用か？」

「^{デュエル}決闘しようぜ！」

やっぱりこいつは^{デュエル}決闘馬鹿だ

「…はあ…わかった。どこでするんだ？」

「確か…デュエル場があるはずッス！そこに行こうッス！」

「分かった……待ってるディスクとデッキを取ってくる。」

移動の最中十代にマナ、マハード、エリアについて聞かれたので、
所々嘘を交えながら説明した

・
・
・
・
・

・
・
・

・

「はあ……」

俺は今日何度目かわからないため息を漏らす

今俺は原作キャラの一人、万丈目準とその仲間達に絡まれていた

「なあ、鳳雅…あいつ誰だ？」

十代が万丈目を指差しながら俺に聞いてくる。どうでもいいが十代の俺への呼び方がいつの間にか呼び捨てになってる……

「貴様！万丈目さんを知らないのか！？」

「万丈目？」

「万丈目準。最近勢力を伸ばしている万丈目グループの三男。」

「ほう…よく分かってるじゃないか…よく調べたな……」

「情報は武器だからね……」

「万丈目グループ？」

「K C社の傘下に無いグループで最近成長が著しいグループだ。ただ、その急激な成長ゆえか周りの企業からは『成金企業』と呼ばれているらしい……」

「そこまで知っているのか!？」

「で?その万丈目グループの万条目準さんが俺たちに何を教えるって」

「貴様……何をやってるの!？」

万丈目が何かを言おうとした時、デュエル場の入口から金髪の子生徒がやってきた

「て、天上院君…僕は彼らにこの学園の事を教えていただけだ」

「万丈目君、そろそろ寮の歓迎会が始まるわ……」

「くっ……いくぞ!お前達!」

そう吐き捨てるとう万丈目とその愉快?な仲間達は出ていった。

「あなた達、あの人たちには関わらない方がいいわよ？」

「ご忠告どうも。ところで君は？見たところブルー生みただけど？」

「私は天上院明日香、あなたは？」

「俺は如月凰雅、見ての通りレッド所属だ。」

「如月凰雅……確か入学試験で唯一試験官にワンターンキルを成功させた人ね……」

「どれだけ話が広がってるんだよ……」

「なあなあ、凰雅？」

俺がうなだれていると十代から声がかけられる。

「なんだ？十代……」

「オベリスクブルーって偉いのか？」

「「「……………」」」

十代以外今の発言に凍りつく……………こいつがこんなに馬鹿だったとは……………

「十代、お前は入学案内を読んでないのか？」

「おう！」

「……………なら説明してやる。この学園は全学年共通で上からオベリスクブルー、ライエロー、オシリスレッドの三つのクラスにクラス分けされる。」

ちなみに神のランクで一番高いラーが一番上のランクのクラスじゃないのはエネコン社長……………じゃない、海馬瀬人の趣味との噂らしい……………

「で、オベリスクブルー……………長いからブルーと省略する。ブルーになるにはこの学園の中等部からの進学組か、この学園から送られてくる『特別推薦状』を持った入学試験優秀受験生だけが入れるクラスだ。俺や十代、翔の様な高等部からの受験生はイエローか、レッ

ドだ。ちなみに女子は高等部からの受験でもブルーだ。」

「『特別推薦状』？」

明日香が反復するように効いてくる

「特別推薦状はこの学園の校長自らが大小関わらず何らかのデュエル大会で優秀な成績を持つてる中学卒業見込みのある生徒2人に送られる推薦状だ。高等部からの受験にも拘らず優秀な成績で合格したならブルー生になれるし、学費も3年間免除される。」

「でも、鳳雅君はなんでそんなこと知ってるんすか？特別推薦状なんて入学案内にも載ってないッスよ？」

「なんでもなにも、俺ともう一人、イエローに所属になった受験番号1番、三沢大地がその特別推薦状をもらったからだ。」

「『えっ！？』」

皆が目を見開いて驚いている

ちなみに三沢はこの事を船の上で教えてくれた。

筆記でトップだった三沢もブルーになれなかったのだから結局俺も普通ならイエローだったんだが……ジジイの所為で↑言いがかり

「分かったか？納得したか？」

「話はわかったけど……それじゃあなんであなたはレッドに居るの？あなたの受験番号は8番それにワンターンキルも成功させたのに……」

「なんでも教師側の不手際でレッド所属になっていた。俺は学費が免除になればどこでも良かったからな……校長にひとり部屋を用意してもらったことを条件にレッド所属に納得した。」

「あの……質問良いツスカ？」

オズオズと翔が手を上げて聞いてくる

「なんだ？翔」

「なんで女子はブルー行きが決定してるんすか？」

「その理由は簡単だ。単純な話、入学する女子生徒の数が少ないからだ。」

「ええ！そんな理由なんツスカ！？」

「そんな理由だ。今回の女子の合格者は男子の1／10以下らしい」

「なあ、そんなこといいからデュエルしようぜ！」

……お前のために話したのに丸々無視かデメエ……

「十代、お前のために説明したのにそんなこと扱いか……それにもうすぐ寮の歓迎会だ、決闘は後日、俺から連絡するから……」

「ちえ……分かったよ。じゃあ寮に戻ろうぜ！」

「あ！待ってよアニキー！」

十代と翔はさつさと寮に行ってしまった。

「それじゃ、俺も行くか……縁があつたらまた会いましょう？明日

香さん」

「明日香で良いわ、なんかあなたがさん付けで呼ぶと違和感があるのよ。敬語もいらないわ」

今の明日香の性格が原作より若干丸くなってるのはなんでだ？まあ良いけど……

「そう？じゃあ俺の事も好きに呼んでくれて構わない。じゃあな……」

「ええ……縁があつたらまた会いましょう、凰雅」

縁があつたらつていうけどこのまま原作通りに進むなら意外と早く再開するんだがな……

明日香のその言葉を聞きながら俺はレッド寮に向かった

・
・
・
・
・

・
・
・

・

その後寮の歓迎会も滞ることもなく終わり、今風呂から帰ってきた俺の前に……

「鳳雅、鳳雅〜なんか鳳雅の…PDAだっけ？それにメールが来てるよ〜」

「はあ？メールだあ？」

俺はタオルで濡れた髪を拭きながらPDAを見る、そこには……

『ドロップアウトボーイ。午前0時に決闘場で待っている。互いのベストカードを賭けたアンティルールで決闘だ。勇気があるなら来るんだな。by万丈目』

と書いてあった。ちなみに現在の時刻…午後11時

「……俺はこれから寝るって言うのにあの野郎……」

「うわあ……鳳雅から黒いオーラが出てるよ……」

俺は無言でカードの入ったケースを開け、そこからデッキを取り出

し、デッキの調整を始めた

ちょうどその時、外に散歩に出ていたユベルが帰ってきた

「ん？鳳雅、何をしているだい、怖い顔して？」

「デッキの調整。」

「近々決闘でもするのかい？」

「今晚0時にな……」

ユベルとの会話もそこに、俺は万条目^{バカ}との決闘のためにデッキを仕上げていった

俺の入学初日は終わらない……

ターン2 「ここがデュエルアカデミアってやつ?」(後書き)

作者「いかがだったでしょうか?ちなみにこの作品内のクラス分けは私の独自設定です。」

鳳雅「通りでな……おかしいと思ったんだ。まずは感想のお礼から!」

作者「霞さま!感想ありがとうございます!」

鳳雅「ありがとうございます。」

作者「そう言えば鳳雅くん、君が持ってきたカードの入ったケースはいくつだい?」

鳳雅「たしか10個ほどだったかな……」

作者「どうやって持ってきたの?」

鳳雅「紐でまとめて。」

作者「さようですか……」

鳳雅「次話は何の話だ?」

作者「万条目御一行様と決闘。」

鳳雅「眠いのに俺を呼びつけた奴らをどうしてくれようか……」

作者「こえー……あ、後お知らせです。」

凰雅「なんだ？」

作者「この作品を読んでくださっている皆さまに凰雅の元に来る精霊を募集します。この作品の感想のところになんの精霊のなまえ、マナやハマードのようにカード名ではない名前（↑これはお好みで）性格を書いて送ってください！」

凰雅「まだ精霊増えんのか！？」

作者「タグに精霊いっぱいって書いてあるじゃん？よいつてもあんまり多いと全員回せない可能性があるからたくさん案が来たら選考しなきゃいけないけど……」

凰雅「マジかよ……」

作者「それでは……ご感想、ご指摘お待ちしております。」

凰雅「次回もお楽しみに。次回の更新は1月20日を予定しています。作者の事ですから予定通りかは分かりませんが……」

作者「否定できないorz」

ターン3 「学園初決闘ってやつ？」（前書き）

作者「予定より1日遅れ」

マナ「しょうがないやつめ」

エリア「やつめ」

鳳雅「阿呆なこと言っていないでさっさと始める作者。」

作者「何故に俺だけ!？」

ターン3 「学園初決闘ってやつ？」

（鳳雅 side）

俺の安眠を邪魔したバカの粛清のためにディスクをつけてブルーの決闘場に来ていた。

原作でもここで十代が万丈目と決闘していたし多分ここだろう……

俺が決闘場につくと十代、翔、明日香がいた。どうやら原作通り十代も万丈目に呼ばれていたらしい……

「ん？貴様は……」

万丈目が何か言っているがスルーの方向で…俺は十代に近づき

「よう、十代、お前も呼び出されたのか？」

「おう！鳳雅！そうなんだよ、さっきメールでな！」

「ふーん…で、どうして明日香がここに？」

「な！？貴様、天上院君を呼び捨て！」

相変わらずなんか言ってくる万丈目は放って置いておく

「偶々よ。」

「偶々？」

「……偶々……」

偶々ならなぜ視線をそらす…やっぱり、明日香がここに居るのは十代の實力を見るためか…

「おい！」

「なんですか？」

いい加減万丈目がうるさいので返事をしてやる

「無視するんじゃない！なぜ天上院君を呼び捨てにしている！？そしてなぜ貴様がここに居る！？」

「大声で一遍に質問しないでください。明日香を呼び捨てにしているのは本人に構わないと言われたから、ここに居るのはあなたがここに」

呼びだしたのでしょうか？」

俺は万丈目にPDAを見せる

「バカな、俺は遊戯十代しか呼んでいないぞ！」

は？何言ってたこいつ…ん？なんか取り巻きの1人が前に出てきた

「すみません万丈目さん、こいつの事が気に食わなくて…」

どうやら取り巻きの奴が勝手に万丈目の名前を使って俺を呼んだらしい、つまり……

「俺の睡眠時間を削ってくれたのはお前か？」

俺が声のトーンを落とし敬語もやめて取り巻きの男を見る。

するとなぜか十代、翔、明日香が後ろで若干顔を青くしていた

「ヒソヒソ……（おい、なんか鳳雅怖くないか？）」

「ヒソヒソ……（あなたも？実は私もなのよ……）」

なんか十代たちが小声で何か言ってるが良く聞こえない

「万丈目はそのまま十代と決闘すればいいよ。俺はこの……睡眠を邪魔したバカを潰す。」

「万丈目さんだ！…フン、少々状況が変わったがやることには変わりはない。ドロップアウト！俺と決闘だ！」

「いいぜ！その決闘乗った！」

向こうは原作どおりってところかな？……さてこっちは……

「こっちもやるのか？さっさと帰って寝たい。」

「なめるなよ！オシリスレッドが！」

今から君そのオシリスレッドの俺の負けるんだよ……

「来なよ……螺^{ねじ}子伏せてやるから……」

「「^{デュエル}決闘!!」」

鳳雅 LP4000

取り巻き LP4000

「先行は俺が貰う、ドロー。…俺は『サイバー・ヴァリー』を攻撃表示で召喚。さらに手札の『イエロー・ガジェット』と『レッド・ガジェット』を手札から墓地に捨て、手札の『マシナーズ・フォートレス』を特殊召喚!」

俺の場に機械の蛇のようなモンスターと下半分がキャタピラのような形をして、右肩?に大きな大砲を付けたモンスターが現れる

サイバー・ヴァリー ATK0

マシンナーズ・フォートレス ATK2500

「何！？攻撃力2500だと！？」

「こいつは手札から機械族モンスターをレベル8以上になるように捨てることで、手札、または墓地から特殊召喚が可能なんだよ。さらにカードを1枚伏せてターンエンド。」

鳳雅 LP4000 手札1

「くっ！俺のターン、ドロー！俺は『ゴ布林突撃部隊』を召喚し、『デーモンの斧』を装備させる！行け！『マシンナーズ・フォートレス』を破壊しろ！」

ゴ布林突撃部隊 ATK2300↓3300

「永続罠、『分岐・デヴァジェンス』を発動。自分の場に機械族モンスターが2体以上存在し、自分の機械族モンスターが攻撃対象に選択された時、ほかの自分の機械族モンスターに攻撃対象を変更させることができる！俺は攻撃対象を『サイバー・ヴァリー』に変更！」

「わざわざ攻撃力0のモンスターに対象を変更させるだど？バカが

！そのまま破壊しろ！」

ゴブリン達が『サイバー・ヴァリー』に飛びかってくる

「『サイバー・ヴァリー』が攻撃対象になった時、このカードをゲームから除外することでバトルフェイズを強制終了させ、俺はデッキから1枚ドローする。」

バトルの強制終了だから『ゴブリン突撃部隊』の表示形式は変更されないが…

「クソ、俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

取り巻き A LP 4 0 0 0 手札 3

あの伏せカードは十中八九攻撃反応型の罠だろな…あんまり関係ないけど…

「俺のターン、ドロー。手札から永續魔法、『前線基地』を発動、手札からユニオンモンスターを1体特殊召喚する。俺は手札から『強化支援メカ・ヘビーウェポン』を特殊召喚。さらに『スクラップ・リサイクラー』を守備表示で召喚。『スクラップ・リサイクラー』が召喚に成功した時、デッキから機械族モンスターを1体墓地に送

る。」

強化支援メカ・ヘビーウェポン ATK500

スクラップ・リサイクラー DEF1200

「さらに『スクラップ・リサイクラー』の効果発動。墓地のレベル4の機械族モンスター2枚をデッキに戻してシャッフルし、その後デッキから1枚カードをドローする。」

俺は『イエロー・ガジェット』と『レッド・ガジェット』をデッキに戻す、手札に『一族の結束』が無いから問題ないしな…仮にこのドローで『一族の結束』を引いても墓地にリサイクラーの効果で墓地に送った『グリーン・ガジェット』があるから問題ないし…

「今引いたカードは『強欲な壺』。これを発動し、2枚ドロー。」

新たに引いたカードは……俺こんなにチートドローではなかったはずなんだがなあ…

「ヘビーウェポンをフォートレスに装備カード扱いで装備、さらに手札から永續魔法『一族の結束』を発動。墓地のモンスターの種族が1種類の時、そのモンスターと同じ種族の自分の場のモンスター

の攻撃力は800ポイントアップする！さらにこの瞬間、手札から速攻魔法『サイクロン』を発動！お前のその伏せカードを破壊する！」

「なんだと！？そんなカードが！？おまけに伏せカードまで…クソ、ミラーフォースが……」

やはり攻撃反応型の罠か…

マシンナーズ・フォートレス ATK 2500 ↓ 3000 ↓ 3800

「攻撃力3800だと！？」

「バトル！『マシンナーズ・フォートレス』で『ゴブリン突撃部隊』に攻撃！薙ぎ払え！！」

フォートレスの右肩？についた巨大な大砲から赤いビームが打ち出された

ゴブリン達はビームに飲み込まれて消滅した

「ぐあああ！」

取り巻きA LP4000 ↓ 3500

「ターンエンド。」

鳳雅 LP4000 手札0

「俺のターン、ドロー！俺は『ジャイアント・オーク』を召喚！『ジャイアント・オーク』で『スクラップ・リサイクラー』を攻撃！」

ジャイアント・オーク ATK2200

巨大な鬼のようなモンスターがスクラップ・リサイクラーに襲いかかる

「俺の場のカードを忘れたのか？『分岐・ダイヴァジェンス』の効果で攻撃対象を『マシンナーズ・フォートレス』に変更する。」

ジャイアント・オークの進路が急に変わり、フォートレスに突っ込んでくる

「しまった！手札から速攻魔法『収縮』を発動！『マシンナーズ・

『フォートレス』の攻撃力を半分にする！」

マシンナーズ・フォートレス ATK3800 ↓2550

「迎撃し、焼き払え！」

オークの攻撃が届く前にフォートレスの放ったビームがオークに直撃し、オークが消滅した

「何故だ！『収縮』を使っただから攻撃力が半分の1900になるはずなのに！？」

「テキストを良く見ろ、『収縮』の効果は元々の攻撃力を半分にするんだ、さらにややこしんだが『収縮』で攻撃力が半分になったモンスターが攻撃力増減系の永続効果を受けていた場合、元々の攻撃力を半分にした後永続効果の増減を再計算するんだよ……よって、まず最初に『収縮』の効果で攻撃力が半分になって1250になったあと永続効果の『一族の結束』と『強化支援メカ・ヘビーウエポン』の効果により攻撃力に1300が加えられ、最終的にフォートレスの攻撃力は2550になり『ジャイアント・オーク』を撃破できたと言う訳だ。理解したか？納得したか？」

「クソオ！！俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

取り巻き A LP 3500 ↓ 3150 手札 0

「俺のターン、ドロー。」

チツ、『大嵐』や『ハリケーン』は来なかったか…

「『前線基地』の効果で『マシンナース・ピースキーパー』を特殊召喚して『スクラップ・リサイクラー』にユニオン。フォートレスでダイレクトアタック！」

「ぐわあああああ！」

取り巻き A LP 3150 ↓ - 650

……なんで伏せカードが発動しないんだ？もしかして2枚ともブラフか？

ま、いつか…

俺は項垂れている取り巻きをそのまま放って、いまだに十代の決闘見ている明日香の元に向かった

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・

＼明日香 side＼

如月凰雅… 入学試験の時に試験官相手に1ターンキルを決めた男…
今万丈目君と戦っている遊戯十代と同じく興味を引いた人…

十代が万丈目君に呼ばれて決闘するって話を聞いて偶然を装ってきた見ればまさか凰雅まで来るなんて…

話を聞くとどうやら凰雅は万丈目君にいつもついてきている人の方に呼ばれたみたいだけど、それにしても睡眠時間を邪魔されたからってあの怒りよう… よつぱど睡眠時間を削られるのが嫌みたいね…
凰雅の後ろに鬼が見えたわ…

十代の決闘を見ながら凰雅の決闘を見ると十代ほど変わった戦い方をしているわけじゃなかった

十代のように融合を多用したり罠カードでコントロールを奪い返したりはしていない。

相手が攻撃してきたら罠カードとモンスターの効果でダメージを防ぎ、相手のモンスターの攻撃力が高かったらそれよりも攻撃力の高いモンスターを用意して倒す。

見たこともないようなカードを多く使っているけど平凡で基本的な戦い方に見える。

そう考えているうちに凰雅は決闘を終え、こちらに歩いてきた。

「なんだ、見ていたのか？明日香」

「ええ、十代の決闘を見ながらだけど…それにしても最後は結構迂闊ね。伏せカードが罠だったらどうしていたの？」

「それは俺も考えてはいた。想定していたのは俺が新たにモンスターを出した時『激流葬』で破壊する。攻撃してきたところを『炸裂装甲』で破壊する2枚目の収縮で攻撃力を半分にしてダメージを減らす。なんかだな。後モンスター次第では『奈落の落とし穴』辺りも考えていたけど…」

そこまで予測してたの！？

「じゃあどうして？」

私がそう聞くと凰雅はデッキから2枚のカードを取り出し私に見せてきたカードを見ると1枚は凰雅が最後に出した『マシンナース・ピースキーパー』、もう1枚は『マシンナース・ギアフレーム』の

カード……

「これは…」

「『マシンナイズ・ピースキーパー』は破壊され墓地に送られた時、デッキからユニオンモンスターを1枚手札に加えることができる。もし『激流葬』ならピースキーパーが破壊され、効果でその『マシンナイズ・ギアフレーム』を手札に加えていた。…それでもユニオンモンスターだからな。」

鳳雅に言われてテキストを見ると確かにユニオンと書いてあった

「さらに俺はピースキーパーを『前線基地』の効果で出したから通常召喚は行っていない。よって手札に加えたギアフレームを召喚。ギアフレームは召喚に成功した時デッキから『マシンナイズ』と名の付くモンスターを手札に加えることができる。さらに言えば『マシンナイズ・フォートレス』はユニオンモンスターを装備していた。ユニオンモンスターを装備しているモンスターが破壊されるとき装備しているユニオンモンスターを身代りにできる。よって『激流葬』が使われた場合は最終的に『一族の結束』で強化された攻撃力2600のギアフレームと3300のフォートレスが残っていた。もう1枚が『奈落の落とし穴』だったとしても『炸裂装甲』や『収縮』だったとしても相手は殆ど詰んでる。手札LV4の機械族モンスターがいるから次につながるし…」

私は啞然としていた。迂闊な行動でも何でもなく相手の行動を読んでの攻撃…

私が茫然としている間に鳳雅はカードをしまいその場を去ろうとしていた

「俺は眠い。帰って寝る。それじゃ…」

「あ、そうなの？それじゃおやすみ鳳雅…」

自然と私は返事を返していた。鳳雅は手をヒラヒラと振りながら決闘場を後にした

如月鳳雅……面白い男…私はそう思った

ターン3 「学園初決闘ってやつ？」（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？」

マナ「私の出番が無〜い〜!!」

エリア「……ない……」

作者「だからこうして前書きとあとがきに……って痛い痛い！エリアちゃん無言で杖で俺の頭をゴンゴンしないで！」

マナ「じゃあ次は私達を出しますか？」

エリア「……（杖を振り上げている）」

作者「善処します……それより感想のお礼！」

マナ「竜王さま！ウツイさま！感想ありがとうございます！」

エリア「……ありがとうございます。」

作者「それじゃ今回はこの辺で……」

マナ「その前にお知らせ！この作品を読んでくださっている皆さまに鳳雅の元に来る精霊を募集しま〜す！この作品の感想のところに応募する精霊のなまえ、わたしやお師匠様のようにカード名ではない名前（↑これはお好みで）、性格を書いて送ってください！待ってま〜す！」

エリア「……ます。」

作者「それでは……ご感想、ご指摘お待ちしております。」

マナ「次回もお楽しみに」
「次回の更新は1月31日を予定しています。作者の事ですから予定通りかは分かりません！」

エリア「ダメダメ作者。」

作者「エリアが言うとダメージがでかい……」

主人公と精霊の設定ってやつ？（前書き）

作者「鳳雅と精霊たちの設定です。精霊は増えればその都度更新していきます」

5 / 18 : 設定を追加

主人公と精霊の設定ってやつ？

・主人公設定

名前：如月凰雅きんげいおうが

年齢：十代と同じ年

見た目：『めだかボックス』の球磨川楔に1〜2？位のアホ毛が生えている

性格：面倒事が嫌い、マイペース。

得意なゲーム：基本はどのジャンルもできる。得意なのはシューティング

好きなもの：睡眠、猫、たいやき

嫌いなもの：睡眠を邪魔するもの、転生させた神、ネズミ、魚介類

特技：料理、速読

口癖：「螺子伏せてあげるよ…」「理解したか？納得したか？」

使用デッキ：その都度違うデッキを使う。メインデッキは持っているがまだ未使用

備考：神のミスでGXの世界に転生させられた。たくさんの精霊に振り回され、主人公の十代たちに振り回される運命を持つかもしれない

ないオリ主

・精霊設定

その1

名前：ユベル

年齢：不明

性格：鳳雅第1な性格

得意なゲーム：『バ○オ』アクションゲーム

好きなもの：鳳雅

嫌いなもの：鳳雅に害成すもの

口癖：あるらしいが不明

使用デッキ：有るらしいが不明

備考：十代のユベルとは違う存在のユベル…鳳雅命な奴

その2

名前：マナ

年齢：禁則事項です♪

性格：一言で言うなら明るい性格

得意なゲーム：音ゲー

好きなもの：鳳雅の料理、楽しい事

嫌いなもの：ジャンクフード、退屈な時間

使用デッキ：有るけど未使用

備考：決闘王、武藤遊戯の精霊、なぜか鳳雅の所に居る。

その3

名前：エリア

年齢：…秘密

性格：『涼宮ハルヒの憂鬱』の長門有希なイメージで

得意なゲーム：格闘ゲーム ゲームを始める前に「私の難易度を決めて」と聞くぐらい強い

好きなもの：鳳雅、テレビ、鳳雅の料理

嫌いなもの：特にないらしい…

使用デッキ：あるけど未使用

備考：鳳雅の精霊、口数が少ない、怒ると手に持った杖で叩く癖がある

その4

名前：マハード

年齢：20代らしい…

性格：まじめな性格

得意なゲーム：パズルゲーム…たまにやってるらしい

好きなもの：平和な日常、お茶

嫌いなもの：争いごと、炭酸飲料

使用デッキ：有るけど未使用

備考：マナと同じ武藤遊戯の精霊、鳳雅の精霊メンバーの良心的存在、苦勞人

その5

名前：レミリア

年齢：秘密よ？

性格：若干気まぐれ

得意なゲーム：テーブルゲーム：特にチェスが得意

好きなもの：紅茶、暇つぶし

嫌いなもの：熱いもの：猫舌、紅茶も少し冷まして飲んでいる

使用デッキ：鳳雅のデッキを勝手に使ったため特定のデッキを持っていない

備考：鳳雅がネタに走ったために登場した精霊。おぜうさま。鳳雅
精霊チームの幼女その1

その6

名前：メイ

年齢：10才くらい？

性格：明るく甘えん坊

得意なゲーム：育てゲー

好きなもの：鳳雅、綿飴

嫌いなもの：苦いもの

使用デッキ：未使用

備考：ドライバー様のアイデアの精霊。 幼女精霊その2

その7

名前：クウリイ

年齢：10才くらい…

性格：クールっぽい性格。（凰雅限定で甘えん坊？）

得意なゲーム：RPG

好きなもの：凰雅、チョコレート

嫌いなもの：辛い物

使用デッキ：未使用

備考：ドライバー様からのアイデアの精霊。 幼女精霊その3

その8

名前：サレス

年齢：たぶん20代前半

性格：おっとり

得意なゲーム：クイズゲーム（多分マハードの次くらいに頭がいい）

好きなもの：お茶（緑茶でも紅茶でもOKらしい…）・ケーキ

嫌いなもの：苦い食べ物・辛い食べ物

使用デッキ：魔力カウンター主体の魔法使い族デッキ……の予定…

備考：峠 陸哉さまからのアイデア精霊。精霊メンバーの常識人…
のはず…

主人公と精霊の設定ってやつ？（後書き）

こんな感じです

ターン4「これがキング。リムゾンってやつ?」(前書き)

蒼影「地震後初めての更新です。」

マナ「もう一つの方の小説が先じゃないの?」

蒼影「こっちが先に書きあがったからこっちから」

マナ「ふーん…ま、いつか。」

蒼影「それではどうぞ!」

ターン4「これがキング。リムゾンってやつ？」

「キン。クリムゾン！」

「どうしたんだい、マナ？急に大声出したりして」

「いやゝなんか言わないといけない気がする……」

「それはいいけど、僕はともかくマナまで留守番なんて珍しいね？」

ユベルはお茶をすすりながらマナに聞く

「だつてえゝタベ鳳雅がゝ」

マナが無くれた顔でテーブルに突っ伏す

「ああ……タベのアレか……まったく、鳳雅の楽しみだった杏仁豆腐を食べたのが悪いんじゃないか……」

ユベルはやれやれと言った顔でテレビの電源を入れる

「だって、おいしそうだったんだもの…ってユベルはまたゲーム？
今日は何やるの？」

「バ。オラのプロフェッショナル。」

「じゃあ私もやる！」

マナもテレビの前に座り、コントローラを握った

「ミスってやられないでね？」

「そっちこそ！」

留守番組は平和だった……

・
・
・
・
・

・
・
・

・

く鳳雅 side }

なんかツッコミを入れなければいけない気がしたが、まあいいだろう…

アカデミアに入ってそろそろ1週間が過ぎようとしているのだが…

俺はふと思った

原作の細かいイベント忘れたけどどうしようかと

原作の大筋は覚えているのだが、細かい部分を完全に忘れた。

まあいいか、その時はその時だ……

・
・
・
・
・

・
・
・

・

時間がとんで夜。

(え？授業？わざわざ言う必要があるのか？と言う訳でカットby
作者)

俺はシャワーを浴び終え、寝間着に着換えて寝る準備は万端だ。

「鳳雅〜！敵が強すぎるよ〜（＞＜）」

「だから言ったのに…」

マナとユベルは休憩をはさみながら今までずっとバ。オ5をしていたらしい…

中盤ぐらいまで進んだらしいがどうやらマナが敵に倒されてしまうため詰まっているようだ。

「知らん、俺は寝る。やってても良いが音量は下げるよ?」

ちなみにこの部屋はマハードの魔術によって防音は完璧。なんという魔術の無駄遣い

俺が、ガンダムだ!〜俺が、ガンダムだ!!

「…何この音?」

何処かのガンダムマイスターの名台詞？迷台詞？の発信源を探すと
発信源はPDAだった…

「なんで着信が変わってるんだ？」

「あゝ多分僕がさっき弄ったせいかな？」

ユベルがバツの悪そうな顔で言ってくる

なぜ弄った？なぜこれなんだ？なんでこんな着信音があるんだ？

と言う疑問は置いておき、俺は電話に出た

『鳳雅！大変だ！』

「俺にとっては大変じゃない。」

『何バカなこと言ってるんだよ！翔が攫われたんだ！』

翔？あいつが？なんで？

確かにあいつ今日ニヤニヤしてたけど……なんだっけ？これ、なんのイベントだっけ？

『とにかく今からそっちに行くから待っててくれ!』

「ちょっと待て!十代!……ちっ!切りやがった…」

「どうするんだい?凰雅。」

「とりあえず隠れろ!十代が来る!」

「わっ、わっ!とりあえず電源を!」

「わあ!待ってマナ!まだセーブが!」

ブツッ!

「あ~~~~~」

「ユベル、早く隠れろ」

「ちくせっ……」

そういつてユベルは消えた

最近ユベルが染まってきている気がする…何に染まっているかは推して測ってくれ…

ドンドンドン!!

そうこうしているうちに十代がやってきた

このままドアを連打されても困るので俺はドアを開ける

「鳳雅! 大変なんだ!」

「さっきも聞いた…翔が攫われたって?」

「ああ! なんか、返してほしければ来いつて……」

「俺も呼ばれたのか?」

「いや…でも鳳雅もいれば心強いからな!」

俺は呼ばれてないのに巻き込まれたのか…目の前のこの馬鹿を殴りたい…

その前に今回の原因である翔をさらった奴を殴りたい…後、元凶の翔を殴りたい…

「わかった……今ディスクを持ってくる。待ってる…」

「おう！」

・
・
・
・
・

・
・
・

・

と言う訳で十代と俺でボートを漕ぎ、やってきたのは女子寮…

……女子寮？

………あー！思い出した！ラブレター事件か！

おアホく、とりあえずあんな偽物のラブレターにホイホイついていった翔はお仕置きだ。

寮につくと明日香と取り巻き2名と翔^{アホ}がいた。

「アニキ〜！鳳雅く〜ん！」

翔^{アホ}がなんか言っているのはスルーして俺は明日香に話しかけた…

・
・
・
・
・

・
・
・

・

く明日香sideく

私は今困っている……

そう困っているのよ…

オシリスレッドの丸藤翔君が女子寮のお風呂を覗いていたと友達
のジュンコともえが知らせてきたから、前から気になっていた遊城
十代の実力を見るため翔君を人質みたいな形にして十代を呼び出し
た…

なのに…なのになぜ…

「よう…明日香、良い夜だなあ？」

不機嫌になつてゐる凰雅までやってくるのよ!?

「お、凰雅?なんでここに居るの?ついではなんなのその格好?」

凰雅の格好は水色のパジャマだった…しっかり同じ色の三角のナイトキャップまで付けて…

それに柄が…

「なんでジンベイザメ?」

「俺が好きだから。」

「そ、そう…ところでなんでここに?」

「このデュエルバカに連れてこられた…」

不味いわね…多分寝ていたか寝るところだったのね…

前に万条目君達に呼び出されてた時、寝ていたところを起こされて

かなり怒っていたから

日を改めて凰雅を呼ぶつもりだったのに…

とにかく、凰雅だけでもとりあえず帰して……

「あんた！レッドの癖になに明日香さんに馴れ馴れしく話しかけてんのよ！」

ジュンコ~~~~！！寝起きで不機嫌な凰雅に余計な刺激を与えないでええ！！

「『ああん？』」

え？なに？なんか凰雅の様子が変わってない？

「ひっ！？」

ジュンコともえは完全に怯えているわね…私も多分腰が引けてると思うわ…

「『おい明日香、とりあえずアホ（翔）を返せ。』」

「括弧の中身が入れ替わってるッス!？」

「『うるさい黙れ』」

「はいっス!!」

凰雅、あなた怖すぎよ!

「『仕方が無い…ここは決闘で決めよう』」

「決闘で？」

十代…あなたは平気なの!? 普通に凰雅と会話してるけど…

「『そうだ、十代、俺、ついでにアホの3人で明日香達3人と決闘。先に2勝した方の勝ち』」

「ついに括弧まで消えた!？」

「『う・る・さ・い・黙・れ』」

「はい……（泣）」

「つまり、あなた達が勝ったら翔君を返す。私達が勝ったら？」

「『そのアホを好きなようにしてくれ。』」

「ええええ！？」

「そう、わかったわ。」

「僕の意味は？」

何言ってるの？

「『ねえよ、そんなもん……』」

「ないわね、そんなもの。」

「うそだんどんどーん……」

「『んじゃ十代、よろしくさん。』」

「おう！任された！」

と言う感じで胃に穴があきそうな緊張の中私達の決闘が始まった…

ターン4「これがキング。リムゾンってやつ?」(後書き)

エリア「…エター。ルフォースブリザード」

ピチューン!

ユベル「いきなり作者がピチュったね……どうしたんだい? エリア」

エリア「私の出番が無い。」

ユベル「マハードもないよ?」

エリア「地の文で1回出てきた。私は無い……」

ユベル「それじゃあ仕方ない。まずは遅くなっただけど感想のお礼から」

エリア「蛮之助丸さま、ドライバーさま。ありがとございます。」

ユベル「次は決闘の回だね。作者曰くここで鳳雅のメインデッキの1つを使うそうだよ?」

エリア「楽しみ。」

ユベル「それとお知らせだ。この作品を読んでくださっている皆さまに鳳雅の元に来る精霊を募集するよ。この作品の感想のところに応募する精霊のなまえ、マナやマハードのようにカード名ではない名前(↑これはお好みで)、性格を書いて送って来てくれ。待つてるよ」

エリア「それでは皆様。バイバイ…」

ターン5「これがシンクロってやつ?」(前書き)

蒼影「タイトル通りですな...」

エリア「...私の出番...」

蒼影「少し無理やりな感じはするg.....」

エリア「エターナル。オースブリザード」

ぴちゅーん!

エリア「...どつぞ...」

ターン5」「これがシンクロってやつ?。」

（鳳雅 side）

「ボルテック・サンダー!。」

「きゃああああ!。」

え?いきなり時間が飛んだ?

そうだった?ちゃんと十代VS明日香はやったぞ?

（十代と明日香の決闘は原作と変わらないのでカットby作者）

しかし、十代の奴、相変わらずのバカ引き…アレが世に聞く主人公補正と言っちゃつか…

「さて、これでこちらの1勝だ…次はこちらは俺がやるがそっちはどっちが出るんだ?。」

「あたしがやるわ!オシリスレッドなんかには負けないわ!。」

今さっき明日香がオシリスレッドの十代に負けたぞ？

「あんなのマグレよマグレ！そう何度もマグレなんか起きないわ！」

こいつ！俺の心呼んだと！？まさか…^{ニユータイフ}NTか！？

「まあいいか…それじゃ始めよう…螺子伏せてあげるから」

「返り討ちにしてやるわ！」

「^{デュエル}決闘！！」

鳳雅 LP 4000

取り巻きその1 LP 4000

「先行は俺が貰うよ、ドロー！」

手札は…幸先がいい

「モンスターをセット、さらにカードをセットしてターンエンド。」

鳳雅 LP4000 手札4枚

モンスター セット1枚

魔法・罠 1枚

「あれだけ強気な割には防御なの？私のターン！」

向こうのデッキは何だっけ？

確か……片方がGXでは珍しいロックバーンでもう一方が水属性主体のビートデッキだったような気がする

どっちがどっちだっけ？分かれば名前もわかるのになあ……

「私はフィールド魔法、『伝説の都 アトランティス』を発動！さらに『ギガ・ガガギゴ』を召喚！」

ギガ・ガガギゴ LV5 ↓ 4 ATK2450 ↓ 2650

あ、こっちか……じゃあこいつの名前は確か……ジュンコで、あっちの

方がもえだな？

「あれ？確かそのモンスターってレベル5じゃなかったっすか？」

翔…やはりお前はアホなんだな…

「アトランティスの効果だ…アトランティスがフィールドにある限り手札とフィールドの水属性モンスターのレベルが1下がるんだよ…ついでに水属性のモンスターの攻撃力・守備力が200上がる」

「えー！！？そんなの卑怯っすよ！」

…卑怯じゃねえよ…普通だよ俺もやるよこれ…

「いくわよ！『ギガ・ガガギゴ』でセットモンスターに攻撃！」

ギガ・ガガギゴが腕を振り上げながらこっちに突っ込んでくる

「悪いが通さず、伏せ（リバーズ）カードオープン、『和睦の使者』！このターン、俺のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージも0になる」

ギガ・ガガギゴの腕がバリアのような膜に阻まれ、裏になっていたカードが表になった

「セットモンスターは『水霊使いエリア』だ」

《やっと…私の出番…》

エリアが意気揚々？な感じで出てきた

水霊使いエリア L V 3 ↓ 2 D E F 1 5 0 0 ↓ 1 7 0 0

「エリアの効果発動、このカードがリバーズした時、相手フィールドの水属性モンスター1体のコントロールを得る。」

《おいで…私の所に…》

エリアが手招きしているが、ギガ・ガガギゴは抵抗しているようだ

《……（イラッ）》

ドカツ!!

あゝエリアの奴相手がなかなか来ないから杖でぶん殴って連れてきた…首根っこ捕まえて…

確かエリアの攻撃力って500くらいだよな？

2000超えのギガ・ガガギゴを殴り倒すなんて……恐ろしい(汗)

「なんか…凄く納得できない取られ方したけど…私はカードを伏せてターンエンド!」

ジュンコ LP4000

モンスター なし

魔法・罫 『伝説の都 アトランティス』

「俺のターン!」

引いたカードは…

…前にも言ったかもしれないけど、俺も大概チートドロいな気がする…
てきた…

「俺はチューナーモンスター、『氷結界の水影』を召喚！」

氷結界の水影 L V 2 ↓ 1 A T K 1 2 0 0 ↓ 1 4 0 0

「『『『『チューナーモンスター??』』』」

説明は後で良いか…

「レベル2『水霊使いエリア』とレベル4『ギガ・ガガギゴ』にレベル1『氷結界の水影』をチューニング！」

L V 2 + 4 + 1 = 7

エリアとギガ・ガガギゴが輝く6の星になり、緑のリングになった水影の間を通る

「うお！？なんだ！何が起きるんだ！？」

「なに！？なんなのよ！？」

「これは…一体…」

「明日香さん！なんですよ！これは！？」

「なんか…凄そうッス〜〜〜！！」

十代、ジュンコ、明日香、ももえ、翔も何が起きたのかわからない様子だ

「凍てつく冷気が全てを凍らせ滅びが訪れる、凍てつく槍で敵を貫け！シンクロ召喚！顕現^{けんげん}せよ、『氷結界の龍 グングニール』！！」

辺りが光った後、そこには氷の体をした龍がそこに居た

氷結界の龍グングニール L V 7 ↓ 6 A T K 2 5 0 0 ↓ 2 7 0 0

「『シンクロ召喚！？』『』『』『』」

あゝこれ説明しないといけないよな

「シンクロ召喚ってのはな…チューナーモンスター1体とそれ以外

の自分のモンスター1体以上でチューナーのレベル＋それ以外のモンスターのレベルの合計と同じレベルのモンスターを融合デッキから召喚する融合を使わない融合みたいなもんだ。」

「はあ……」

「ま、分からなくても良いや、説明めんどくさいし！ グングニールの効果発動！1ターンに1度、手札を2枚まで墓地へ捨てて、捨てた数だけ相手フィールド上に存在するカードを選択して、選択したカードを破壊する！俺は手札1枚を捨ててその伏せカードを破壊！」

グングニールが口から冷気を吐きだすとジュンコの伏せカードが凍り、砕け散った

「なんて反則能力！」

しらんわ。こんなのダークダイブボンバーとかに比べればまだいい方だと思っぞ…

「グングニールでダイレクトアタック！『神槍・スピア・ザ・グングニール』……」

「東方っスか！？」

なぜあのアホが東方ネタを知ってるかは知らないが、グングニールは口から赤いレーザーみたいなプレスが飛んでいった

「きゃああああー!!」

ジュンコ LP 4000 ↓ 1300

このまま一気に行こう。

「さらにメインフェイズ2に移り、手札から『デュアルサモン二重召喚』を発動！このターン、俺はもう一度通常召喚が行える。グングニールを生贄にしてアトランティスの効果でレベル6になった『氷結界の虎将ガンダーラ』を召喚！」

氷結界の虎将 ガンダーラ LV 7 ↓ 6 ATK 2700 ↓ 2900

「わざわざあのモンスターを生贄にしてまで？何考えてるのよ!？」

今わかるって…

「俺はこれでターンエンド。このときガンダーラの効果発動！1ターンに1度、墓地に存在する『氷結界の虎将 ガンダーラ』以外の『氷結界』と名の付くモンスター1体を特殊召喚できる！」

「そんな！なんてインチキ！？」

インチキじゃねえよ…

(GXの世界なら十分インチキですby作者)

「ガンダーラの効果で再びグングニールを特殊召喚！」

俺の場に再びグングニールが現れる

鳳雅 LP4000 手札1

モンスター 氷結界の龍 グングニール 氷結界の虎将 ガンダーラ

魔法・罫 なし

「くう…私のターン！」

向こうはモンスターも伏せカードもなし…このまま押し切れるか？

「私は『マーメイドナイト』を守備表示で召喚！」

マーメイドナイト L V 4 ↓ 3 D E F 7 0 0 ↓ 9 0 0

この世界って表側守備表示で出せるのがいいな…

「さらにカードを3枚伏せて、ターンエンド！」

ジュンコ L P 1 3 0 0 手札1

モンスター マーメイドナイト

魔法・罫 伏せ3枚

「俺のターン！」

どうすっかな…今のドローで手札は2枚、相手の伏せは3枚…選ぶのミスったらヤバいな…

「グングニールの効果発動！手札を2枚捨てて、左右の伏せカード

を破壊する！」

グングニールのプレスで2枚のカードが凍り、砕けた

破壊されたカード 『和睦の使者』 『サルベージ』

チツ！1枚はブラフカードか！？

どうする？待つか？いや、ここで待っても相手に時間を与えるだけか……

「バトル！グングニールでマーメイドナイトに攻撃！」神槍・スピ
ア・ザ・グングニル！」

グングニールの赤いレーザーがマーメイドナイトを貫き、爆発した

「続けてガンダーラで攻撃！」

ガンダーラがジュンコに殴りかかる

「そうはいかないわ！^{トラップ}罠発動！^{リアクティブアーマー}炸裂装甲！攻撃してきたモンス
ター1体を破壊するわ！」

その瞬間、ガンダーラが爆発し、消えた

「これでモンスターは復活しないわ！」

「面倒な…ターンエンド！」

鳳雅 LP 4000 手札 0

モンスター 氷結界の龍 グングニール

魔法・罫 なし

「私のターン！」

「……くっ！私は墓地の『マーメイドナイト』を除外して『水の精霊アクエリア』を守備表示で特殊召喚！…ターンエンドよ…」

水の精霊アクエリア LV 4 ↓ 3 DEF 1200 ↓ 1400

ジュンコ LP 1300 手札 1

モンスター 水の精霊アクエリア

魔法・罾 なし

「俺のターン！」

「あんたのスタンバイフェイズにアクエリアの効果発動！あんたのその反則モンスターの表示形式を変更するわ！」

氷結界の龍 グングニール ATK2700 ↓ DEF1900

「構わない！手札から『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロ！」

「そこでドロカードを引く！？」

うるさいぞ明日香引いたものは仕方が無いだろ

「さらにグングニールの効果発動！手札を1枚捨て、アクエリアを破壊！」

アクエリアが凍って粉々に砕け散る

「でも、そのモンスターはこのターン攻撃できないわ!」

「誰がグングニールで攻撃するなんて言った? 手札から『憑依装着・エリア』を召喚!」

《……最後は私……》

なんかものすごく張り切ってるエリアが出てきた……

憑依装着・エリア ATK 1850 ↓ 2050

「そんな……」

「エリアでダイレクトアタック!」

《エーナル。オース。リザード……》

最近好きだねその技……

「きゃああああ!……!」

ジュンコ LP1300 ↓ - 750

こうして翔^{アホ}が原因の決闘は十代と俺のストレート2連勝で終わった…

ターン5「これがシンクロってやつ?」(後書き)

エリア「……ぶい」

マナ「エリアちゃん大活躍だね」

凰雅「作者は?」

マハード「前書きでエリアにやられてからまだ復活していません」

凰雅「じゃあ俺達だけでやるか、まずは感想のお礼から」

マハード「混沌の魔法使いさま、感想ありがとうございます」

凰雅「しかし、エリアに頼まれてデッキを弄ったが良く回ったな」

マナ「本当は純粋な氷結界のデッキだっけ?」

凰雅「ああ、それをエリアに「私も入れて」と言ってきたからこんなデッキになった」

エリア「ちなみに私のメインデッキでもある……ちょっと違うけど……」

マナ「良いな」凰雅「今度は私達を使ってね」

凰雅「作者に言え。」

マハード「ここで読者のみなさんにお知らせです。」

エリア「皆さまに凰雅の元に来る精霊を募集…この作品の感想のところに応募する精霊のなまえ、マナやマハードのようにカード名ではない名前（↑これはお好みで）、性格を書いて送って来てね……待ってます」

マナ「次回は？」

マハード「決闘後の会話と凰雅殿に精霊が増える話だと作者は言っていました」

凰雅「また気苦労が増えるのか…」

エリア「マスタ…頑張れ…」

マナ「それじゃあ皆さん！」

マハード「次回も見えていってください。」

ターン5 / 5 『簡単な解説ってやつ?』

マナ「鳳雅!これって何?」

鳳雅「これの前の話『これがシンクロってやつ?』で俺が使ったデツキのレシピとデュエルの簡単な解説をここです。今後デュエルの話の後に大抵、こんな感じのおまけを挟むらしい」

マナ「へーじゃあ早速レシピからいってみよう!」

鳳雅「ちなみにTFオリジナルは後ろの方に【TF】と書いてあります」
タッグ・フォース

デツキレシピ

上級

・氷結界の虎将 グルナード

・氷結界の虎将 ガンダーラ×2

・海竜・ダイダロス

下級

・氷結界の番人プリズド×2

・氷結界の軍師

・氷結界の舞姫×2

・氷結界の水影×2

・氷結界の武士×2

・水霊使いエリア×2

・憑依装着 - エリア

・デブリドラゴン×2

・スノーマンイーター

・フィッシュボーグ - ガンナー×2

魔法

・伝説の都 アトランティス×3

・氷結界の三方陣

・氷結界の紋章×2

・サイクロン

・貪欲な壺

・強欲なウツボ

・強欲な壺

罨

・フローラル・シールド×2【TF】

・リミット・リバーズ×2

・聖なるバリアー ミラーフォース

・王宮のお触れ×2

・ダメージ・コンデンサー

・激流葬

・神の宣告

・和睦の使者

計42

エキストラ

・氷結界の龍　ブリーナク

・氷結界の虎王ドウローレン

・氷結界の龍　グングニール×2

・氷結界の龍　トリシューラ×3

・ブラック・ローズ・ドラゴン

・アームズ・エイド×2

計10

鳳雅「こんな感じだな…エリアが混じったから純粋な氷結界のデッキとは言わないが…基本的な回し方は氷結界のモンスターを中心に回して行く感じだな。デブリがあるから墓地からエリアを持って来てシンクロが早いかな？」

マナ「他は？」

鳳雅「あとは本編でやった通りアトランティスでレベルが下がったガンダーラを呼んで、墓地の氷結界を展開していくとか、正規の方法で特殊召喚した憑依装着・エリアにアームズ・エイドをつけて殴るってやり方もある」

マナ「へ〜じゃあ次は今回の決闘を振り返ってみよう!」

凰雅「と言っても使ってるカードの世代が違うから結構一方的な場面が多いな」

マナ「そうだね〜ところで最期の方でジュンコさんが手札1枚残してたけどなんで?」

凰雅「そうだな、アクエリアは特殊召喚だから手札のカードが下級モンスターなら壁に出来ただろうし、魔法でも伏せてブラフにすることができたはずだ。さらに手札のカードがダイダロスだったら…」

マナ「だったら?」

凰雅「効果でフィールドをリセットされてこっちがヤバかった…」

マナ「なるほど〜」

凰雅「多分最後の1枚はレベル8のゴギガ・ガガギゴだったと思うぞ」

マナ「あのカードはアトランティスがあってもレベル7だもんね」

凰雅「まあこんな感じかな……」

マナ「じゃあ今回はこの辺で！」

凰雅・マナ「またねー！」

マナ「感想待ってまゝす！」

ターン6・・・「新しい精霊ってやつ?」(前書き)

蒼影「鳳雅の精霊が増えるよー」

鳳雅「気苦労がまた増える…orz」

蒼影「それではどうぞ!」

ターン6・・・」「新しい精霊ってやつ?」

「凰雅side」

明日香達との決闘も終わり、翔と言う名のアホも返してもらった

「い、痛いっス！凰雅君！どうして僕の頭をグリグリしているんスカ!?!」

今俺はアホの頭を拳でグリグリしている

「やかましい。元はと言えばお前がこんなところにホイホイ来なければこんなことにはならなかったんだよ！俺の貴重な睡眠時間を削りやがって……」

「そんな〜僕はただラブレターの……」

「いいわけすんな!」

「ぎゃあああああああ!」

・
・
・
・
・

・
・
・

・

・

「と言う訳で俺達は帰るからな？」

「え、ええ……わかったわ。」

「よし……帰るぞ、十代。」

「お、おう……でも翔は大丈夫なのか？」

十代が俺の足元を見ながら言う

俺の足元には翔がぐったりした様子で倒れている

「大丈夫だ……ほら翔、行くぞ。」

「酷いっス……」

そのまま翔の首根っこを掴んで女子寮を後にした

帰り？当然俺の代りに翔にボートを漕がせたよ？当然じゃないか…

・
・
・
・
・

・
・
・

・
・

・

（明日香 side）

「くやしー！！あんなのマグレに決まってるのに！！」

鳳雅達が帰った後ジュンコが地団太を踏みながらそう叫んでいた…
全く周りに迷惑でしょう……

「ジュンコさん、はしたないですよ……」

ももえがジュンコを諫めているけどあんまり効果は無いみたい…

けど…鳳雅の今回の決闘…前の決闘でも知らないカードを使っていたけど、今回はシンクロ召喚なんて言う知らない召喚方法まで使っていた…

「いつか戦ってみるべきよね……」

「流石明日香さん！そうこなつくちゃ！」

「は？」

急にジュンコが私にそう言った

「は？って明日香さんがあのいけ好かない奴と今度決闘するんでし
よう？」

「私も見てみたいですわ！」

「え？…え？」

私の知らない所で勝手に話が進んでる！？

「ち、ちょっと…」

「見てなさいよー！えーっと…ももえ、あいつの名前なって言ったっけ？」

「確か…如月鳳雅ですわ！ほら！入学試験で先生を相手にワンターン・キルを決めた。」

「それもマグレに決まってるわ！如月鳳雅！首を洗って待ってなさい！」

勝手に私と鳳雅の決闘が決まってる！？

ま、いつか…（↑考えるのを諦めた）

とりあえず、鳳雅とは放課後にでも決闘を挑みましょう…

いつの放課後かは決めてないけど……

……

・
・
・

・
・

・

く 鳳雅 side く

…勝手に何かが決まった気がする…

十代達と別れ、ようやく自分の部屋の前までたどり着いた…

とりあえず、ボートを漕いだり決闘したりして汗かいたからまたシヤワアの浴びなおしかな…

そう思いながら部屋を開けると……

「あ！鳳雅、お帰り〜！」

マナがいつも通り明るい声で…

「鳳雅殿、大丈夫でしたか？」

マハードが気遣いの言葉を…

「マスタ…お帰り…」

エリアは眠たそうになりながらも…

「鳳雅、どうだった？…」

ユベルも若干眠そうな顔で…

出迎えの言葉をかけてくれた。

皆起きて俺の帰りを待っているとは思わなかったので嬉しかった…

のだが…

「こいつら誰だ？」

俺が部屋の真ん中を指差して聞いた

「あら？あなたが呼び出したのに、随分な言い草ね…」

「この人が私達のマスターになる人なの？」

「そつみたいですね…」

そこには少女が3人いた…

そのうち2人はすぐに正体はわかった

白を基調とした色の服を着てピンクの髪を縦ロールにして、頭に羊のような形の帽子？をかぶってにこにこ笑う少女は言わずもがな『白魔導師ピケル』。

ピケルとは逆に黒を基調とした服にストレートの金色の長髪、頭にはウサギの様な帽子をかぶってクールな表情で俺を見る『黒魔導師克蘭』。

だが、もう一人が分からない…

見た目は完全にどこかの紅い館のおぜうさまなんだが…微妙に違う…

まず、服はおぜうさまの服そのもののだが、色が本来のおぜうさまは白いと赤の服に対し、この少女は白と薄い青の服だ。

一番違うと思ったのは背に生えている羽だ。

本来のおぜうさまはコウモリのような羽に対してこの少女の羽はどこかの？のような氷の羽が生えていた…

………本当に誰？

「私の事がわからないの？さっき決闘で散々私を使っただじゃない？」

さっきの決闘？

さっきの決闘で使用頻度が高かったのは……まさか！？

「お前…もしかしてグングニールか！？」

「やっと気付いたの？」

「お前、龍のはずだろ…なんでそんな姿なんだ…？」

「あなたが私の攻撃名を勝手に変えたからよ…ま、この姿は気に入ったけどね？」

……まさかネタに走ったからとは完全に予想していなかった……

「さっきそのパソコンでこの姿の元を知ったからこれからは私の事はレミリアかレミィって呼んでね？」

「頭が痛くなってきた…」

「ま、何にせよ、これからよろしくね…鳳雅。」

そう言つてグングニール改めレミリアが右手を差し出してきた

「ああ…これからよろしく…」

俺も右手を出してお互いに握手した

「じゃあ今度は私の番…」

「ちょっと待ちなさいピケル。次は僕の番です！」

するとピケルとクランが我先にと俺に自己紹介をしようと詰め寄ってきた

「待て、今日はもう遅い…明日にしよう。幸い明日は日曜で休みだ。」

俺がピケル達を止めながら時計を指差す。先程の決闘騒ぎの所為で

既に12時を回っている

ちなみにデュエルアカデミアは授業は土曜までで、日曜は休みだ。

「え……」

ピケルは不満気の様だ

「わかりました。」

クランは素直に引き下がったようだ

「そう言う訳で自己紹介は明日だ。ほれ、皆布団敷いて寝ろ」

そう言いながら俺はすでに敷いてある自分の布団に入る

「む……じゃあ私、お兄ちゃんと一緒に寝る！」

ピケルが訳のわからない事を言っただけの布団に入ろうとする。

っていかにお兄ちゃんって俺の事か？

「ズルイです！僕もお兄様と一緒に寝たいです！」

クラン、お前もか…

2人が俺の布団に入ろうとお互いに睨み合っていると…

「マスターが寝れない…あっちで寝て。」

「あゝゝ！！？」「」

いつの間にかエリアが俺の布団に入っていた…本当にいつの間に入った？

「「グスン……（泣き）」」

結局、ピケルとクランは一緒に同じ布団で寝たようだ…

レミリアはマハードに出してもらった布団に一人で寝たようだった…

………

・
・
・

・

・

・・・翌朝・・・

「皆さん、改めてはじめまして。僕は黒魔導師クランです。」

「白魔導師のピケルです！よろしくね！」

「氷結界の龍のグングニールよ。この姿の時はレミリアって呼んで。」

鳳雅の部屋のテーブルで鳳雅と精霊たちがお互いに自己紹介をしていた

「ブラックマジシャンガールのマナです！よろしくね？」

「マナの師匠のマハードです。よろしく」

「…エリア…よろしく」

「僕はユベル。よろしく」

互い互いに紹介も済んだ所でピケルが言った。

「お兄ちゃん！私にも名前を付けて！」

「名前？マナやマハードみたいな愛称の事か？」

「そう、それ！お願い」

ピケルが上目づかいでお願いしてくる。そこにクランも…

「あの、その…僕にも付けてください。お兄様…」

同じく上目遣いでお願いしてきた…大抵の男はこれだけで何でも言う事聞きそうだな…

「わかった、わかった。そうだな……」

しかし俺はこつこつのは苦手なんだよなあ…

「じゃあピケルはメイ。クランはクウリイで。」

「やったあ！」

「ありがとうございます。お兄様。」

ピケル改めメイとクラン改めクウリイがお互いに喜びあっていた

「エリアちゃん。エリアちゃんはいいの？名前付けてもらわなくて…」

「今はいい…いつか鳳雅につけてもらおう」

「そっか」

マナとエリアがそのような会話をしていたのを俺は隣で聞いていた

その時……

ドンドンドン!!

「鳳雅！居るか？」

決闘バカ（十代）がやってきた

「十代もタイミングが悪いよね？こんなときに来なくてもいいのにさ」

ユベルがため息をつきながらドアを見ている

「……とりあえず出てくる……」

俺はドアを開けた

「なんだ十代？何か用か？」

「鳳雅！決闘しようぜ！」

……この決闘バカは……もう怒りや苛立ちを通り越して呆れが来そうだ

「…わかった。寮の前で待ってる、今デツキをとってくる」

いっそのこと1回決闘してしまおう……

「ホントか！？よっしゃあ！じゃあ待ってるぜ！」

そう言って十代は走っていった

俺は十代の決闘バカっぷりに頭を抱えながら部屋に戻った

ターン6・・・「新しい精霊ってやつ？」（後書き）

蒼影「と言つ訳で今回から鳳雅の精霊になったレミリアとメイとクウリイです。」

レミリア「よろしく願ひするわ。」

メイ「よつろしく〜！」

クウリイ「よろしくお願いします。」

蒼影「まずは感想のお礼から」

レミリア「戎鴛さま。感想ありがとう。嬉しいわ」

メイ「ありがとう〜！」

クウリイ「ありがとうございます。」

蒼影「ピケルとクランのアイデアはドライバーさまから頂きました。愛称は私が考えたのですが…」

メイ「ありがとう！ドライバーさん！」

蒼影「ただ、ピケルとクランの鳳雅の呼び方はドライバーさまのアイデアではピケルが『お兄様』、クランが『兄さん』だったのですが、本編の呼び方に変更しました。」

レミリア「わたしは？」

蒼影「前に東方ネタを使ったとき思いついたので出した。見た目のイメージは東方のレミリアの服の紅い部分を薄い青にして、背中 of 羽を同じく東方のチルノの羽のような感じです」

レミリア「そう…ここで読者のみなさんにお知らせがあるわ。」

メイ「みんなにお兄ちゃんの元に来る精霊を募集しまゝす！…この作品の感想のところに応募する精霊のなまえ、マナやマハードのよ うにカード名ではない名前（↑これはお好みで）、性格を書いて送 っ て来てね！待ってまゝす！」

クウリイ「次回はお兄様が十代さんと決闘します。」

蒼影「その前に人物の設定の所にレミリア達を追加しないと…」

レミリア「それでは…」

蒼影「次回もお楽しみに！」

ターン7「十代と決闘ってやつ？」（前書き）

蒼影「久々の更新だな…」

凰雅「今まで何やってたんだ？」

蒼影「大学が始まって描く暇がなかった」

凰雅「今更じゃね？」

蒼影「俺の通ってる大学石巻にあるんだぞ？」

凰雅「納得した」

蒼影「それではどうぞー！」

ターン7「十代と決闘ってやつ？」

（鳳雅 side）

デッキを持ってレッド寮の前まで来るとギャラリーが集まっていた
ギャラリーの中には三沢もいた

「おい、三沢…なんでこんなに人が集まってるんだ？」

「十代が明日鳳雅に決闘を申し込むって昨日大声で言っていたから
な、気になった生徒がここに集まっているんだ」

俺は頭を悩ませた、まさかこんな事態になっているとは…

「まあいいや…とりあえずさっさと終わらせよう…せつかくの休日
だ。ゆつくり休みたいんだ…」

「楽しい決闘にしようぜ！」

「はいはい…とりあえず螺子伏せてやるから…」

「デュエル！」

十代 LP4000

鳳雅 LP4000

「先行は俺が貰うぜ！ドロー！」

さて…どうするか…十代は主人公補正とディスティニードロー持ちだし…

「俺は『E・HERO クレイマン』を守備表示で召喚！カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

E・HERO クレイマン DEF2000

十代 LP4000 手札3枚

モンスター 『E・HERO クレイマン』

魔法・罫 セット2枚

「俺のターン、ドロー！」

手札は…まあまあだな、なんとかなるか？

「俺は手札からフィールド魔法『ディフォーマーD・フィールド』を発動。」

「なんだ？見たことないフィールドだな…」

「さらに永続魔法『つまずき』を発動して『ディフォーマーD・ラジカッセン』を召喚！」

俺の場に赤いロボットのようなモンスターが現れた

しかし次の瞬間ロボットが変形してラジカセになった

D・ラジカッセン ATK1200 ↓ DEF900

「なんでモンスターが守備になったんだ!？」

十代が驚きの表情で俺に聞いてくる

「三沢、説明してやってくれ…」

俺は三沢に説明を振った

「わかった。十代、鳳雅のモンスターの表示形式が変わったのは『つまり』の効果だ。」

「『つまり』の効果？」

「『つまり』がフィールドにある限り、フィールドに召喚されたモンスターは強制的に守備に変更されてしまうんだ。」

「ということは行動が1ターン遅れるってことか？」

「そう言う事だ…」

「説明が終わったところで『D・フィールド』の効果発動。」

すると『D・フィールド』に『1』とカウントが浮かび上がった

「なんだ？そのカウント？」

「『D・フィールド』はフィールドのモンスターの表示形式が変わるたびにDカウンターディフォーマーが乗る。そしてDカウンター1つにつきフィールド上で表になっている『D』ディフォーマーと名の付くモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。」

「つまり、表示形式を変える度にそのディフォーマーってやつが強くなっていくのか!？」

「まずいな…『つまずき』があるからモンスターを召喚するたびにカウンターが乗るのか…単純だが有効なコンボだ…」

三沢は顎に手を当てながら冷静に状況を分析している

「ターンエンド。」

さて…十代はどう攻めてくるのかな？

鳳雅 LP4000 手札3枚

モンスター 『D・ラジカッセン』

魔法・罫 『つまずき』 『D・フィールド』
DディフォーマーC・1

「俺のターン！ドロー！」

「俺は、『E・HERO フェザーマン』を守備表示で召喚して、
ターンエンドだ！」

E・HERO フェザーマン DEF1000

十代 LP4000 手札3枚

モンスター 『E・HERO クレイマン』 『E・HERO フ
エザーマン』

魔法・罫 セット2枚

十代の奴、D・フィールドにカウンターを乗せないように最初から
守備で出してくるな…

考えてやっているのか、直感でやっているのかは分からないが…

「俺のターン！」

「『D・ラジカッセン』を攻撃表示に変更し、さらに手札から『D・

ボードン』を攻撃表示で召喚する、さらに手札から装備魔法『ダブルツールD&C』ディアーランドシーをラジカッセンに装備！」

俺の場にスケボーのようなモンスターが現れ、すぐに完全にスケボーに変形し、そのあとラジカッセンが人型に変形し、その手にはドリルのような槍？とカッターが装着される。

D・フィールド DC・1↓2↓3

D・ラジカッセン DEF900↓ATK1200↓2200↓3100

D・ボードン ATK500↓DEF1800

「攻撃力3100う！？」

翔がラジカッセンの攻撃力を見て驚いている、これで驚いていたらこの先やっていけないぞ？

「鳳雅、その装備カードの効果を教えてくれないか？」

三沢も若干驚いた顔をしているが、すぐに冷静になり、俺にカード

効果の説明を振ってくる

「『ダブルツールD&C』は自分のターンと相手のターンで違う効果を持つている。まず、自分のターンでは装備モンスターの攻撃力を1000ポイント上げ、さらにバトルフェイズの間だけ攻撃対象のモンスターの効果を無効化できるんだ。相手ターンでは攻撃力は元に戻るが、相手はこのカードを装備したモンスターしか攻撃対象にできず、装備モンスターと戦闘をした相手モンスターをそのダメージステップ終了時に破壊する効果がある…」

「なんだって!？」

三沢もさすがに驚かざる得ないようだな

まあ装備できる対象が限定されているがこのカード1枚で自分のターンでは『デーモンの斧』と『レインボー・ヴェール』、相手のターンでは『レアゴルド・アーマー』と『古代の機械掌』の効果を得るようなものだしな…

「そんなカード、卑怯じゃないんすか!？」

お前はそればかりだな翔…

「そうでもないこのカードを装備できるのは自分の場の『パワーパ

「ワール・ツール・ドラゴン」か『D』と名のついたレベル4以上の機械族モンスターにしか装備できない。ちなみに現在LV5以上の『ディフォーマーD』は存在しない。それに、このカードは『自分の場』とフィールドを限定しているから装備モンスターのコントロールが相手に移ったりしたらこのカードは破壊されるんだよ。理解したか？納得したか？」

翔は説明を聞いて唸りながら頭から煙が出ていた…そうだった、こいつは十代以上の？だった…十代も煙が出てるし……

「さて、説明も終わったことだし、バトルと行こう！ラジカッセンでクレイマンに攻撃！」

ラジカッセンが手に持ったドリルでクレイマンを貫こうとする

「させないぜ！罨発動！『ヒーローバリア』を発動！自分のフィールドに『HERO』が存在するとき、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！」

ドリルはクレイマンの前に現れたバリアに阻まれるが…

「『D・ラジカッセン』の効果は発動！このカードが攻撃表示のとき、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる！」

「なに!？」

再びラジカッセンがドリルを突き出すと、今度はクレイマンを難なく破壊で来た

「くそ!それならリバースカードオープン!『ヒーロー・シグナル』!自分のモンスターが戦闘で破壊されたとき、デッキ、手札からLV4いかの『E・HERO』と名のつくモンスターを特殊召喚できる!俺はデッキから『E・HERO バーストレディ』を守備表示で特殊召喚!」

E・HERO バーストレディ DEF800

「…ターンエンド」

D・ラジカッセン ATK3100 ↓ 2100

鳳雅 LP4000 手札2枚

モンスター 『D・ラジカッセン』 『D・ボードン』

魔法・罫 『つまずき』 『D・フィールド DC3』 『ダブ

ルツールD&C ラジカッセンに装備」

「くっ！俺のターン、ドロー！」

「俺は手札から『天使の施し』を発動！デッキからカードを3枚ドロー！そのあと手札からカードを2枚捨てる！」

おいおい…俺が言える立場じゃないけど、そこで施しを引くか？

「俺は手札からフィールド魔法『大嵐』を発動！」

「ゲッ！」

フィールドに風が吹き乱れ、フィールドの魔法・罠が吹き飛んでいく

「これで鳳雅のモンスターの攻撃力は元に戻るぜ！」

D・ラジカッセン ATK2100 ↓ 1200

くそつたれが！『D・フィールド』を破壊された揚句、『つまずき』まで！おまけに墓地にディフォーマーがいないから『D・フィールド

ド』のもう1つの効果が発動しない！

やってくれるな！十代！

「さらに手札の『融合』を発動！フィールドのフェザーマンとバーストレディを融合！来い！『E・HERO フレイム・ウィングマン』！」

「やったあ！アニキのフェイバリットカードだ！」

E・HERO フレイム・ウィングマン ATK2100

「さらに手札の『ミラクル・フュージョン』を発動！墓地の『E・HERO スパークマン』と『E・HERO エッジマン』を融合！」

いつの間にスパークマンとエッジマンを墓地に落としていた？…さっきの施しかあ！？この……ご都合主義の塊があ！！

「来い、『E・HERO プラズマヴァイスマン』！」

E・HERO プラズマヴァイスマン ATK2600

「一気に上級ヒーローが2体！アニキが有利になった！」

「いっけえ！フレイム・ウィングマンでラジカッセンに攻撃！」

「このとき、手札の『ガジェット・ドライバー』を墓地へ捨てて効果発動！自分フィールド上に表側表示で存在する「D」を指定して表示形式を変更する！俺はラジカッセンを指定して表示形式を変更！」

D・ラジカッセン ATK1200 ↓ DEF900

「構うものか！そのまま攻撃を続行！」

「ラジカッセンの効果発動！このカードが守備表示のとき、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！」

「だったら、プラスマヴァイスマンでラジカッセンに攻撃！プラスマヴァイスマンは守備モンスターを攻撃したとき、攻撃力がその守備力を超えていれば貫通ダメージを与えるぜ！」

「だが、ボードンの効果発動！このカードが守備表示のとき、このカード以外の『D』と名のつくモンスターは戦闘では破壊されない！」

「けど、ダメージは受けてもらっぜー!」

「ちっ!」

鳳雅 LP4000 ↓ 2300

「ターンエンドだ!」

十代 LP4000 手札1枚

モンスター 『E・HERO フレイム・ウィングマン』 『E・HERO プラズマヴァイスマン』

魔法・罠 なし

「俺の、ターン!」

「俺は手札からチューナーモンスター『ディフォーマーD・スコープン』を守備表示で召喚!」

D・スコープン LV3 ↓ 4 DEF1400

「チューナー？見たことないモンスターだ」

「まさか、また！」

「来るのか！？シンクロ召喚が！」

あんまりシンクロ使いたくないんだよなあ……目立つから……でもこのご都合主義の塊に勝つにはこれぐらいしないとな！

「レベル3の『D・ボードン』にレベル4の『D・スコープン』をチューニング！」

LV3 + LV4 = LV7

ボードンが3つの光る星に変化し4つの輪に変化したスコープンの中を通る

「星と星が集いし時、機械仕掛けの竜が今ここに舞い降りる！その力で道を開け！シンクロ召喚！」

そして辺りが光に包まれた

「突き崩せ！『パワー・ツール・ドラゴン』！」

そして俺の場に黄色いボディに右手に大型のマイナスドライバー、左手は左手自体がシヨベルのような形をした機械の体の竜が現れた

パワー・ツール・ドラゴン ATK 2300

「シンクロ召喚！？何だこれは！？」

三沢がこれ以上ないってくらい驚いている

「三沢、説明は後でしてやる、『パワー・ツール・ドラゴン』の効果発動！1ターンに1度、自分のデッキから装備魔法カードを3枚選択し、相手にその中からランダムに1枚選択させる。そして、相手が選択したカード1枚を自分の手札に加え、残りのカードをデッキに戻してシャッフルする！」

俺はデッキからカードを3枚抜き出し十代に裏向きで見せる。ちなみに俺がデッキから選択したのは『団結の力』、『ダブルツールD&C』、『デーモンの斧』の3枚だ

「さあ、十代！3枚のうち1枚を選べ！」

「じゃあ、俺は真ん中のカードを選ばぜ！」

十代に指定されたカードを手札に加え、残りをデッキに戻した

「そして今手札に加えた『団結の力』を『パワー・ツール・ドラゴン』に装備！」

パワー・ツール・ドラゴン ATK 2300 ↓ 3900

「すごいな、攻撃力3900か…さすが鳳雅と言ったところか…と言つか鳳雅、口調変わってきてないか？」

「これが俺の素だ。最近はあるまり素でしゃべってなかったからな…」

こんなディスプレイードロー持ちとやっていたら口調も崩れるわ…

「バトル！パワー・ツールでプラズマヴァイスマンを攻撃！クラフティ・ブレイク！」

俺の掛け声とともにパワー・ツール・ドラゴンの右手のドライバーが高速で回転しプラズヴァイスマンを貫いた

「うわっ！」

十代 LP 4000 ↓ 2700

「さらに手札から永續魔法『リサイクル』を発動して、ターンエンド」

鳳雅 LP 2300 手札0枚

モンスター 『パワー・ツール・ドラゴン』 『D・ラジカッセン』

魔法・罫 『団結の力 パワー・ツール・ドラゴンに装備』 『リサイクル』

「俺のターン！ドロー！」

カード引いた十代の顔が歪む、逆転のカードは来なかったようだ…

「俺はフレイム・ウィングマンを守備表示にしてカードを1枚伏せ

てターンエンド。」

E・HERO フレイム・ウィングマン ATK2100 ↓DEF
1200

十代 LP2700 手札1枚

モンスター 『E・HERO フレイム・ウィングマン』

魔法・罠 セット1枚

「俺のターン！」

「俺のスタンバイフェイズに『リサイクル』の効果発動！ライフを300支払うことに自分の墓地にあるモンスター以外のカードを1枚、デッキの一番下に戻す」

「？なんか、意味あるのか？」

「あるから使っただろうが：俺はライフを支払い、墓地の『ダブルツールD&C』をデッキの下に戻す」

鳳雅 LP2300 ↓2000

「そして、『パワー・ツール・ドラゴン』の効果を発動！」

再びデッキから3枚抜き出し十代に裏向きのまま見せる

「…じゃあ今度は一番右だ！」

十代に指定されたカードを手札に加える……十代…運がないな…あの強運はドローのみなのか？

「俺は今手札に加えた『メテオ・ストライク』を『パワー・ツール・ドラゴン』に装備！」

「あれ？攻撃力が変わってないぞ？」

「十代、あれは装備モンスターに貫通効果を付加させる装備魔法だ。さっき十代が使ったプラスヴァイスマンみたいに守備モンスターを攻撃したとき、守備力を攻撃力が肥えていればその分だけ貫通ダメージを与えるんだ」

三沢説明ご苦労さん…

「て言うことは…俺のフレイム・ウィングマンを攻撃されたら貫通ダメージを受けるってことか!？」

「その通りだ、さらにラジカッセンを攻撃表示に変更、バトル!」
パワー・ツール・ドラゴン』でフレイム・ウィングマンを攻撃!ぶち抜け!クラフティ・ブレイク!」

D・ラジカッセン DEF900A↓TK1200

パワー・ツールのドライバーがフレイム・ウィングマンを貫…

「畏発動、『攻撃の無力化』!バトルを無効にしてバトルフェイズを終了させる!」

… かなかった… まさかの無力化… ミラフォじゃないのかよ…

「くそ!ターンエンド」

凰雅 LP2000 手札1枚

モンスター 『パワー・ツール・ドラゴン』 『D・ラジカッセン』

魔法・罾 『団結の力 パワー・ツール・ドラゴンに装備』
メテオストライク パワー・ツール・ドラゴンに装備』 『リサ
イクル』

「俺のターン！」

ああ…終わったな俺…

『フレイム・ウィングマンを攻撃表示に変更してラジカッセンに攻
撃！行けえ！フレイムシュート！』

「ちい！」

鳳雅 LP 2000 ↓ 1100

「そしてフレイム・ウィングマンの効果発動！このカードが戦闘に
よってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの
攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

「ああ…俺の負けかよ…」

「楽しい決闘だったぜ！鳳雅！」

「まあ…同感だ…」

そして俺はフレイム・ウィングマンの出した炎に包まれた

鳳雅 LP1100 ↓ - 100

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

・

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「そうかい？ならよかった、じゃ、俺は帰るから…あ、三沢、この後空いているな部屋に來い、シンクロ召喚について「見つけたわよ！如月鳳雅！！」……やつぱり後にしよう、厄介そうなのが來た…」

俺がそう呟いて声のほうを向くとそこには昨日のブルー女子3人組がいた

「……明日香、何しに来たんだ？わざわざブルー寮から遠い（こ）レッド寮）まで」

「それは……あんたを倒しにきたにきまつてるじゃない!!」……昨日からこんな調子なのよ……」

「つまりリベンジか？」

「今日はあたしじゃないわ！あんたがデュエルするのは明日香さまよ!」

頭が痛くなってきた……

「……本当か？明日香……」

「まあそうね、私もあなたと戦ってみたかったし……」

そう言つて明日香がデュエルディスクを構えた

「はあ……わかったよ……1回だけな……俺は寝足りないんだ……」

そう言いながら俺はデッキを変える

「?さっきのデッキを使わないの?」

「さっきは十代に負けたからな、2連敗とかしたくないし、久々に主力デッキを使う」

「つまり、今まで本気じゃなかったということ?」

「そうじゃない、デッキのほうが今まではネタデッキ寄りだったからな…今回はガチだ」

それを聞いた明日香は

「それは楽しみね」

笑みを浮かべながらそう言った

「デュエル!!」

ターン7「十代と決闘ってやつ？」（後書き）

レミリア「みなさんこんにちわ、鳳雅の精霊の中でたぶん3番目に偉いであろうレミリアよ」

マナ「誰がそんなこと決めたの!？」

レミリア「私に決まっているじゃない。ちなみに1番がマハードで2番目はエリアよ……」

マナ「お師匠様はともかくなんでエリアちゃん？」

レミリア「この前、エリアに黙っておやつのドーナツを食べたら凍らされたわ…氷結界の龍であるこの私がよ…それ以来、エリアのおやつは食べないようにしたの……」

マナ「あ、あははは……じゃあここで感想の御礼をしよう!」

レミリア「瀬河ナツさま、マスク野郎さま感想ありがとうございます」

マナ「ありがとう!」

レミリア「さて、この後どうしましょうか？」

マナ「え？普通に終わりにしてもいいんじゃないの？」

レミリア「いえ、それじゃつまらないと思ってね…他の作者さんならここでコラボの募集とかしちゃうんじゃないかと思って……」

マナ「不定期更新のこの作者さんがコラボなんて無理だと思うんだけどな」

レミリア「あなたも結構笑顔でひどいこと言うのね…まあいいわ、次回は何のお話？私の華麗なサクセスストーリー？」

マナ「いやいや、明日香さんと凰雅の決闘でしょ？」

レミリア「そうだったわね。ついに凰雅のガチデツキが見れるのね…」

マナ「どんなデツキだろうね？」

レミリア「それでは今回はこの辺で」

マナ「次回もよろしくね！」

ターン7、5「今回の解説って奴？」

レミリア「さて、皆さん先ほどぶり、レミリアよ」

鳳雅「鳳雅です」

蒼影「作者の蒼影です」

鳳雅「今回はこの3人で解説をやっていきます」

レミリア「まずは今回鳳雅が使ったデッキレシピよ」

上級

・なし

下級

・ガジェット・ドライバー

・D・カメラン×2

・ D・クロツケン×2

・ D・スコープン×3

・ D・ボードン×2

・ D・マグネンU×2

・ D・モバホン×2

・ D・ラジオン×3

・ D・ラジカッセン×3

・ 名工虎鉄×2

魔法

・ 大嵐

・ ダブルツールD&C×2

・ つまずき×2

・ D・スピードユニット

・ D・フィールド×3

・ 一角獣のホーン×2

・強欲な壺

・団結の力×2

・魔導師の力

・メテオ・ストライク

・D・コード

・デーモンの斧

・リサイクル

罨

・聖なるバリアー ミラーフォース

・D・スクランブル

・D・バインド×2

・光の護封壁

・ブレンD

計45

エキストラ

・パワー・ツール・ドラゴン×3

鳳雅「といった感じだな」

レミリア「見事に上級モンスターがいないわね」

蒼影「基本はD・フィールドで強化されたディフォーマーでビートするから上級はいらないんだよね…」

鳳雅「基本的な使い方は本編でやったとおりつまずきの効果で強制的に表示形式を変えながらD・フィールドのカウンターをためる」と、現実では表側で守備モンスターを出せないからすぐにカウンターは溜まる」

蒼影「ついでにパワー・ツールも出して押し切るのも有りただ、装備カードが多めになってるから事故りやすい」

レミリア「でも結構変則的というかひねくれたデッキね…装備カードを少なくしてディフォーマー1色にしまえば良かったんじゃない？」

凰雅「もしくはディフォーマー抜いてヴァイロン入れたほうが回ったかもな」

蒼影「そこまでやったらガチになっちゃうじゃない？今回の話は凰雅が負けること前提なんだから」

レミリア「どういこと？」

蒼影「全戦全勝の主人公ってどうなんだよって俺は思っている人間だからね…いくらガチで組んだデッキでも手札事故とかあるんだし？それに俺はデッキを考えるときソリティアっぽくならないようにしてるし…あくまで俺の主観だけど、あれは見ていて詰まんないからね」

凰雅「なるほど…」

蒼影「だから今回のデッキはどう回っても五分五分なデッキを組んだつもりだよ？」

レミリア「でも結局負けたのね回避する方法はなかったの？」

蒼影「今回の原因は凰雅が十代の伏せカード『攻撃反応型』…その

中でも炸裂装甲や聖なるバリアみたいな『破壊型』だと決めつけてしまつて、ラジカッセンを攻撃表示にしたことだね。」

レミリア「実際伏せカードは無力化だったわね…」

鳳雅「これは完全に俺のプレイミスだな…」

蒼影「あそこはラジカッセンは守備のまま攻撃でよかったんだよ、無力化だったらあのフィールドのまま十代のターンに移っていたし、仮に破壊型の罠でもパワー・ツールの効果で一応パワーツールは残っていたんだ。十代はバウンス系や除外系は持つてなさそうだしね…」

レミリア「なるほどね…ところで鳳雅の最後の手札はなんだつたの？」

鳳雅「D・スピードユニットだ。手札にディフォーマーが来なかったから使えなかったけど…」

蒼影「伏せてブラフにするのも有りだけど十代は関係なく攻撃してきそうだ」

レミリア「そうね…」

蒼影「今回はこんなものかな…みなさん感想、ご指摘待ってます」

レミリア「何かいいことあったらいいわね？」

凰雅「『化物語』ネタかよ!？」

レミリア「いいじゃない、私はこの小説の締めはこれでいくことを提案するわ」

蒼影「まあ、いいんじゃない？」

凰雅「いいのかよ!？」

レミリア「それでは改めて、何かいいことあったらいいわね？お相手はレミリアと…」

蒼影「蒼影と…」

凰雅「如月凰雅でした!」

ターン8・・・『これが凰雅のガチデッキってやつ?』(前書き)

マハード「みなさん、お待たせいたしました。久しぶりの更新です」

ユベル「今回は凰雅のガチデッキが出ます」

マハード「それではどうぞ」

ターン8・・・『これが凰雅のガチデッキってやつ?』

（明日香side）

いつの間にか決まってしまった凰雅との決闘が始まった

「私のターン!」

「私は『エトワール・サイバー』を召喚!カードを1枚伏せてターンエンド!」

エトワール・サイバー ATK1200

明日香 LP4000 手札4枚

モンスター エトワール・サイバー

魔法・罫 セット1枚

「俺のターン!」

「俺は『マジカル・コンダクター』を召喚!」

マジカル・コンダクター ATK1700 MC（魔力カウンター）
・0

鳳雅のフィールドに現れたのは翠色の服を着た長髪の女性

「こいつは魔法カードが発動されるたびに魔力カウンターを2つ乗せる効果がある。そして1ターンの一度、手札、墓地からこのカードから取り除いた魔力カウンターと同じ数のレベルのモンスターを特殊召喚できる」

「鳳雅のデッキは魔力カウンターを使う魔法使い族のデッキか!？」

三沢君が鳳雅のモンスターの効果を聞いて叫んだ

魔力カウンターを使うモンスターは魔法カードを使う度にカウンターを乗せ、そのカウンターを使って様々な効果を及ぼすシリーズのカード。レア度は結構高いはずだけど

「さらに手札からフィールド魔法、『魔法都市エンディミオン』を発動！」

鳳雅が魔法を発動させると周りが大きな塔が立ち並ぶ都市になった

マジカル・コンダクター MC・0 ↓ 2

「鳳雅、そのフィールド魔法はどういう効果なんだ？」

「効果は長いからその都度話す。とりあえずこのカードにも魔法力
ードを使う度、魔力カウンターが乗る」

魔力カウンターが乗るフィールド魔法？聞いたことないわ…

「さらに続けて永続魔法、『リサイクル』を発動、効果はさっき十
代との決闘で使ったから説明は割愛するぞ」

マジカル・コンダクター MC・2 ↓ 4

エンディミオン MC・0 ↓ 1

「そして、マジカルコンダクターのモンスター効果発動。このカー
ドから魔力カウンターを4つ取り除き、手札から『王立魔法図書館』
を守備表示で特殊召喚」

王立魔法図書館 DEF2000 MC・0

マジカル・コンダクター MC・4 ↓ 0

1ターン目でここまで回せるものなの？

凰雅って運がいいわよね…

「さらに魔法カード『魔力掌握』を発動！このカードは自分の魔力カウンターを乗せることができるカードに魔力カウンターを1つ乗せるカード。さらにデッキから同名カードを1枚手札に加えてシャッフルする。俺は『王立魔法図書館』にカウンターを乗せる！そして、魔法を発動させたことにより、『マジカル・コンダクター』、『魔法都市エンディミオン』、『王立魔法図書館』にカウンターが乗る」

マジカル・コンダクター MC・0 ↓ 2

エンディミオン MC・1 ↓ 2

王立魔法図書館 MC0 ↓ 1 ↓ 2

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

凰雅 LP4000 手札1枚

モンスター マジカル・コンダクター（魔力カウンター2個） 王
立魔法図書館（魔力カウンター2個）

魔法・罾 魔法都市エンディミオン（魔力カウンター2個） リサ
イクル セット1枚

「私のターン、ドロー！」

今引いたカードは『融合』…これで手札の『ブレード・スケーター』
と場の『エトワール・サイバー』を融合して『サイバー・ブレイダ
ー』を召喚すれば、一気に私が有利になる…

「私は手札から『融合』を発動するわ！手札の『ブレード・スケ
ーター』とフィールドの『エトワール・サイバー』を融合！『サイバ
ー・ブレイダー』を融合召喚！」

サイバー・ブレイダー ATK2100

「『サイバーブレイダー』は相手のモンスターの数で効果が決まる
わ！鳳雅のモンスターは2体…よって、『サイバー・ブレイダー』
の効果は攻撃力が倍になる効果よ！」

「明日香が魔法カードを使ったことで俺のモンスターにカウンター
が乗る」

サイバー・ブレイダー ATK 2100 ↓ 4200

マジカル・コンダクター MC・2 ↓ 4

王立魔法図書館 MC・2 ↓ 3

エンデュミオン MC・2 ↓ 3

「攻撃力4200だって！？すげえな！」

重大がはしゃいでいるけど、肝心の凰雅は顔色一つ変えない…

結構イラツとくるわね…

「バトルよ！『サイバー・ブレイダー』で『マジカル・コンダクター』を攻撃！グリッサード・スラッシュ！」

サイバー・ブレイダーが回転しながら凰雅のモンスターへ突撃していく…

通るかしら…？

「畏発動、『くず鉄のかかし』！相手のモンスターの攻撃を1度だ

け無効にする！」

サイバー・ブレイダーの攻撃は突然現れた鉄のかかしに阻まれてしまった……

「さらにこのカードは発動後、再び俺の魔法・罠ゾーンにセットされる」

「そんな！？何度も使える罠カードがあるなんて！？」

そんなの反則じゃないの！？

このままだと、鳳雅のモンスターを破壊するには最低2回攻撃する必要があるじゃない！

「……私はカードを1枚伏せてターンエンドよ……」

明日香 LP 4000 手札2枚

モンスター サイバー・ブレイダー

魔法・罠 セット2枚

「俺のターン、ドロー！俺のスタンバイフェイズに『リサイクル』の効果発動！ライフを300払うことで墓地にある魔法が罫カード1枚をデッキの1番下に戻す！俺の墓地にある魔法・罫は『魔力掌握』のみだから、『魔力掌握』をデッキの1番下に戻す！」

凰雅 LP 4000 ↓ 3700

「ちょっと待て凰雅！ということは君はライフが続く限り、『魔力掌握』を使い続けることができるのか！？」

「どづいことっすか？」

三沢君が説明を始めた様ね…気になるから聞いてみましょう

「凰雅の説明だと『魔力掌握』はデッキから同じ『魔力掌握』を手札に加える効果がある…本来なら『魔力掌握』は3枚しか使えない…しかし、手札に1枚『魔力掌握』を残しておいて次のターンに『リサイクル』でデッキに戻すのを繰り返し『リサイクル』のコストで払うライフが続く限り、凰雅は『魔力掌握』を使い続けることができるということだ。」

それって、凰雅のデッキは魔力カウンターがメインのデッキだから…まずいじゃない！？

「そして、『王立魔法図書館』の効果発動！このカードに乗っている魔力カウンターを3つ取り除くことで、デッキからカードを1枚ドローできる！ドロー！」

王立魔法図書館 MC・3↓0

凰雅 手札3枚

あれ？ちよつと…まずくない？今頭に『ソリティアk t k r』とか頭を過^{よぎ}つただけど…

「さらに手札から『魔力掌握』を発動！『王立魔法図書館』にカウンターを乗せ、さらに魔法を発動させたことで魔力カウンターが乗る…」

王立魔法図書館 MC・0↓1↓2

マジカル・コンダクター MC・4↓6

エンデュミオン 3↓4

「ここで、『魔法都市エンデュミオン』の効果の1つを説明するぞ、1ターンに1度、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを取り除いて自分のカードの効果を発動する場合、代わりにこのカード

に乗っている魔力カウンターを取り除く事ができる！」

「ということとはつまり…」

「『王立魔法図書館』の効果発動！このカードの代わりにエンデュミオンに乗っているカウンターを3つ取り除いてデッキからカードを1枚ドロロー！」

エンデュミオン MC・4 ↓ 1

鳳雅 手札4枚

…おかしいわね、このターン開始の時には鳳雅の手札は2枚だったはず…それが1分足らずで倍の枚数になるものだったかしら？

「さらに手札から『天使の施し』を発動、デッキから3枚カードをドロローし、そのあと2枚手札からカードを墓地に送る。魔法カードを使ったから魔力カウンターが乗る」

王立魔法図書館 MC・2 ↓ 3

マジカル・コンダクター MC・6 ↓ 8

エンデュミオン MC・1 ↓ 2

凰雅 手札5枚

「さらに『王立魔法図書館』の効果で1枚ドロー！」

王立魔法図書館 MC・3↓0

凰雅 手札6枚

凰雅はどれだけドロースれば気が済むのよ！

「…やっと来たか、まあ1枚しか入ってないしな…ここで『マジカル・コンダクター』の効果発動！魔力カウンターを3つ取り除いて手札からチューナーモンスター、『氷結界の風水師』を特殊召喚する」

氷結界の風水師 DEF1200

マジカル・コンダクター MC・8↓5

「チューナー…来るわね！シンクロ召喚が！？けど、『サイバー・ブレイダー』の効果発動！相手のモンスターが3体のとき、相手の魔法・罫・モンスターの効果は無効になる！ただし攻撃力は元に戻るわ…」

「ということは鳳雅の場の魔力カウンターも無効になる……」

サイバー・ブレイダー ATK 4200 ↓ 2100

マジカル・コンダクター MC・5 ↓ 0

エンデュミオン MC・2 ↓ 0

「全然問題ないな……この効果を見越して粗方魔力カウンターを使っ
たんだし……俺はレベル4の『王立魔法図書館』にレベル3の『氷結
界の風水師』をチューニング！」

LV3 + LV4 = LV7

少し派手な服装の女性のモンスターが3つの光の輪になって、大き
すぎる図書館を包んでいく……

「星と星が集う時、魔導の英知が舞い降りる。光指す道となれ！シ
ンクロ召喚！」

すると辺りが光に包まれた

「神秘を魅せよ！『アーカナイト・マジシャン』！」

光の中から出てきたのは白い法衣を着て手に宝石のついた杖を持った女性の魔法使いだった

アーカナイト・マジシャン A T K 4 0 0

？攻撃力400？

「鳳雅、そのモンスター攻撃力低くないか？」

十代がそのモンスターを指さしながら鳳雅に聞いた

「慌てるなよ、十代。『アーカナイト・マジシャン』はシンクロ召喚に成功した時、このモンスターに魔力カウンターを2つ乗せる。アーカナイトの攻撃力はこのカードに乗っている魔力カウンター1つにつき1000ポイントアップする！」

アーカナイト・マジシャン M C ・ 0 ↓ 2 A T K 4 0 0 ↓ 2 4 0 0

「サイバー・ブレイダーは俺の場のモンスターが2体に減ったこと

で効果無効の効果は消え、攻撃力は倍になる」

サイバー・ブレイダー ATK 2100 ↓ 4200

「くう……」

完全にこっちのモンスターの効果と対処法を知ってるわね、凰雅は……

けど攻撃力は圧倒的にこっちが上よ、どうする気かしら……

「さらに『アーカナイト・マジシャン』の効果発動！フィールドの魔力カウンターを1つ取り除くことでフィールド上のカードを1枚破壊する。俺は『アーカナイト・マジシャン』のカウンターを1つ取り除いて明日香の『サイバー・ブレイダー』を破壊！もう1つ取り除いて明日香の左の伏せカードを破壊する！」

アーカナイト・マジシャン MC・2 ↓ 1 ↓ 0 ATK 2400 ↓
1400 ↓ 400

凰雅のアーカナイト・マジシャンの杖から光が出てきて私のサイバー・ブレイダーと伏せカードを破壊した

破壊された伏せカードは『ドゥーブルパッセ』……残ってもサイバー・

ブレイダーが破壊されたあとじゃあっても意味がない…でも、サイバー・ブレイダーを破壊されたのは痛いわ…

「でも、おかげでそのモンスターの攻撃力一気に下がったわ！どうするつもり！？鳳雅！」

「慌てるなって、俺はまだこのターン通常召喚をしていない。俺は『魔導騎士ディフェンダー』を召喚！」

すると鳳雅の場に大きな盾を構えた法衣を着た魔法使いのモンスターが現れた

魔導騎士ディフェンダー ATK 1600

「ディフェンダーは召喚に成功した時、このモンスターに魔力カウンターを1つ乗せる。」

魔導騎士ディフェンダー MC・0↓1

「バトル！『アーカナイト・マジシャン』で明日香にダイレクトアタック！」

「畏発動！『炸裂装甲』^{リアクティブアーマー}！『アーカナイト・マジシャン』を破壊するわ！」

攻撃力は低くてもあのモンスターの効果は危険すぎる！

「『魔導騎士ディフェンダー』の効果発動！フィールド上の魔力カウターを1つ取り除くことで魔法使い族モンスター1体の破壊を免れる！」

「そんな！？」

明日香 LP 4000 ↓ 3600

「さらにディフェンダーとコンダクターで追撃のダイレクトアタック！」

「ううー！！」

明日香 LP 3600 ↓ 2000 ↓ 300

「カードを1枚伏せてターンエンド……」

凰雅 LP3700 手札3枚

モンスター アーカナイト・マジシャン（魔力カウンター0個）

魔導騎士ディフェンダー（魔力カウンター0個）

魔法・罫 魔法都市エンデュミオン（魔力カウンター0個） リサ
イクル セット2枚（うち1枚くず鉄のかかし）

「私のターン、ドロー！」

けど、どうしようこの状況…はつきりいつて不利も良い所なんだけど…

「私は『サイバー・チュチュ』を召喚！」

サイバー・チュチュ ATK1000

「さらに手札から速攻魔法『プリマの光』を発動！自分の『サイバー・チュチュ』を生贄に手札から『サイバー・プリマ』を特殊召喚！」

サイバー・プリマ ATK2300

「サイバープリマの効果発動！このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上の魔法カードをすべて破壊するわ！」

「その効果の前にチェーンが乗りエンデュミオンと『マジカル・コンダクター』に魔力カウンターが乗る」

マジカル・コンダクター MC・0 ↓ 2

エンデュミオン MC・0 ↓ 1

「そんなの関係ないわ！」

「残念ながら関係ある。『魔法都市エンデュミオン』の効果発動、このカードが破壊される時、このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除くことで、このカードの破壊を免れる」

「そんな！？」

結局破壊できたのは『リサイクル』だけ！？

エンデュミオン MC・1 ↓ 0

「……ターンエンドよ……」

明日香 LP300 手札0枚

モンスター サイバープリマ

魔法・罠 なし

「俺のターン、ドロー！」

鳳雅のモンスターの攻撃力なら私のモンスターは倒せない…けどモンスター効果であっさり破壊されるわよね…

「俺は手札から『ミラクルシンクロフュージョン』を発動！」

「『ミラクルシンクロフュージョン』??」

また知らないカード…今度はどんな反則効果なのよ?

「このカードはフィールド・墓地から融合に必要なモンスターをゲームから除外してシンクロモンスターを融合素材とする融合モンスターを融合召喚扱いで特殊召喚するカードだ。十代の『ミラクルフ

ユージョン』と同じようなカードだ」

シンクロモンスターを素材にする融合モンスターなんているの!?

「俺は場の『アーカナイト・マジシャン』と墓地の『氷結界の風水師』をゲームから除外して現れる! 『覇魔導師アーカナイト・マジシャン』!」

覇魔導師アーカナイト・マジシャン ATK1400

鳳雅の場に現れたのは蒼くて威圧感を感じるようなデザインの法衣を着たアーカナイト・マジシャンのようね…

「『覇魔導師アーカナイト・マジシャン』は融合召喚に成功した時、このカードに2つ魔力カウンターを乗せる。このカードの攻撃力は魔力カウンター1つにつき1000ポイントアップ! さらに魔法を使ったから『マジカル・コンダクター』とエンデュミオンに魔力カウンターが乗る」

覇魔導師アーカナイト・マジシャン MC・0 ↓2 ATK1400
0 ↓3400

マジカル・コンダクター MC・2 ↓4

エンデュミオン MC・0 ↓ 1

「攻撃力3400ですって!？」

なんでわざわざこんなモンスターを出すのよ!？

「そして『マジカル・コンダクター』の効果発動、このカードから2つ魔力カウンターを取り除き、墓地からチューナーモンスター『ナイトエンド・ソーサラー』を特殊召喚!」

ナイトエンド・ソーサラー ATK1300

マジカル・コンダクター MC・4 ↓ 2

「またチューナー!？」

何なの? オーバーキルでもする気なの鳳雅は!？

「『ナイトエンド・ソーサラー』のモンスター効果、このカードの特殊召喚に成功した時、相手の墓地から2枚カードを除外する。おれは明日香の墓地から『サイバー・ブレイダー』と『融合』を除外、そして、レベル4の『魔導騎士ディフェンダー』にレベル2の『ナイトエンド・ソーサラー』をチューニング!」

再びモンスターの1体が光の輪になってもう1体のモンスターが輪をくぐる

「集いし魔導が、荒らぶる嵐を呼び起こす！光さす道となれ！シンクロ召喚！」3

「出でよ！『マジックテンペスター』！」

現れたのは半透明の刃の鎌を持った女性のモンスターだった

マジックテンペスター ATK 2200

「『マジックテンペスター』のシンクロ召喚に成功したとき、このカードに魔力カウンターを1つ乗せる！そして手札から『強欲な壺』を発動！デッキからカードを2枚ドロー、そして、『マジックテンペスター』効果発動！1ターンに1度、自分の手札を任意の枚数墓地へ送る事で、その枚数分だけ魔力カウンターを自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターに置く！俺は手札4枚全てを墓地に送り、『覇魔導師アーカナイト・マジシャン』に4つカウンターを乗せる。さらに魔法カードを使ったことで『マジカル・コンダクター』と『魔法都市エンデュミオン』に魔力カウンターが乗る」

覇魔導師アーカナイト・マジシャン MC・2↓6 ATK340
0↓7400

マジカル・コンダクター MC2↓4

エンデュミオン MC1↓2

「は、はは……」

私は笑うしかなかった…攻撃力7000越えて…これが、鳳雅の本気のデッキ……十代たちも鳳雅のモンスターの攻撃力に言葉を失っているような…

「行くぞ明日香！『覇魔導師アーカナイト・マジシャン』で『サイバー・プリマ』を攻撃！『恋符・マスタースパーク』！」

「また東方ネタっすか！？」

丸藤君がなにか言ってるけど私には何を言っているのかわからなかった

分かるのは目の前に迫る眩いばかりの光の奔流だけだった…

ぴちゅーん！

なぜかいつもとは違う気の抜けた破壊音でモンスターは破壊され、
そのまま光は私へ向かってきた

「きゃあああああー!!」

明日香 LP300 ↓ - 4800

こうして私と凰雅の決闘は凰雅の圧勝で幕を閉じた

ターン8・・・『これが鳳雅のガチデッキってやつ?』(後書き)

マナ「みなさんこんにちわ」

マハード「みなさんこんにちわ」

マナ「今回は魔法使いデッキの話だったので私たちがあとがきを担当します」

マハード「まずは感想のお礼からいかせていただきます」

マナ「遊戯王様、感想ありがとうございます」

マハード「一同を代表してお礼を申し上げます」

マナ「この後今回の決闘の開設がありますのでここではこれで一回区切りますね」

マハード「すぐに8、5話がありますので詳しいことはそちらで」

マナ「それではみなさん! 8、5話で会いましょう」

8 / 5ターン・・・「解説ってやつ？」

蒼影「どうも、みなさん。今回も今回のデッキの紹介と決闘の簡単な解説を始めたいと思います。司会はいつもの通り、私、蒼影が務めさせていただきます。そして、今回のゲストは魔法使いデッキと言う事で、マナに来ていただきました」

マナ「やつほゝこんにちわゝマナです」

蒼影「ではまず、今回鳳雅が使ったデッキのレシピを紹介します。レシピは以下の通りです」

上級

- ・神聖魔導王エンディミオン

- ・闇紅の魔導師

- ・魔法の操り人形

下級

- ・マジカル・コンダクター×2

・クルセイダー・オブ・エンデュミオン×2

・王立魔法図書館×2

・魔導戦士ブレイカー

・魔導騎士ディフェンダー×2

・水晶の占い師×2

・ナイトエンド・ソーサラー×2

・氷結界の風水師

・エフェクト・ヴェーラー

・見習い魔術師×3

魔法

・魔法都市エンデュミオン×3

・魔力掌握×3

・リサイクル

・魔法石の採掘×2

・手札抹殺

・封印の黄金櫃×2

・テラ・フォーミング×2

・強欲な壺

・天使の施し

・ツイスター×2

・サイクロン

・デイメンション・マジック×2

・貪欲な壺×2

・ミラクルシンクロフュージョン

畏

・次元幽閉×2

・マジシャンズ・サークル×2

・対抗魔術

・神の恵み

・神の宣告

・隠された魔法書

・奈落の落とし穴×2

計55枚

エクストラ

・アーカナイト・マジシャン×3

・マジックテンペスター×3

・エクスプローシブ・マジシャン×3

・TGハイパー・ライブラリアン×2

・フォーミュラ・シンクロン×2

・覇魔導師アーカナイト・マジシャン×2

計15枚

蒼影「となっております」

マナ「今までで一番デッキの枚数が多いね…手札事故がおきちゃうんじゃない？」

蒼影「そうだね、大体事故率は10回中3〜2回、でもドローカードが多めに入っているから何とかなるものだよ現実では強欲な壺と天使の施しが禁止だから、それと罨カードを2〜3枚抜いてデッキの枚数を減らした方が回るよ」

マナ「では今回の決闘の簡単な解説をしていききたいと思います！」

鳳雅「今回の対戦相手は天上院明日香。アニメの中で結構オリカを使っているキャラなので、書くのに苦労するキャラです。」

マナ「今回使ったアニメオリジナルのカードは『ドゥーブルパッセ』、『プリマの光』だっけ？」

蒼影「『ドゥーブルパッセ』は相手のモンスターが自分のモンスターを攻撃してきた時、相手の攻撃してきたモンスターと自分の攻撃対象になったモンスターをそれぞれダイレクトアタックに強制的に変更するカードだな、『プリマの光』は自分フィールドの『サイバー・チュチュ』をリリースすることで手札から『サイバー・プリマ』を特殊召喚するカードだ。前者の『ドゥーブルパッセ』不発だったけどね…ちなみに『サイバー・プリマ』もOCG版ではなく、アニメ版の仕様になってます。OCGとの違いはOCG版はアトバンス召喚成功時のみ、フィールドの表側表示の魔法カードを破壊するのに対し、アニメ版は『プリマの光』に対応するように召喚・特殊召喚時にフィールド上の表側の魔法を破壊する効果になっています」

マナ「へへへ今回凰雅は十代との決闘の時と同じように『リサイクル』を使っていたね？」

蒼影「『魔力掌握』と『リサイクル』は相性が非常に良いです。今回はあまり目立ちませんがこのコンボで『王立魔法図書館』にカウンターをため、カードを大量にドローすることができます。これに『神の恵み』が発動していれば、ドローフエイズのドローも含めて最低でも『リサイクル』3回分のライフも回復できます。『クルセイダー・オブ・エンデュミオン』が居れば毎ターン確実に図書館の効果も使えるしね」

マナ「今回は壺と施して強引にドローしてたけどね…それとアーカナイトってあんなに攻撃力上がるの？」

蒼影「上がります。アーカナイトとテンペスターが並ぶ頃には大量ドローも安定してきて手札が大量に余っている状態になりがちです。なので運がいい時はアーカナイトに10個近くカウンターを乗せる事が出来たりしてあつという間に攻撃力10000越えなんてのもざらです」

マナ「怖いねーそう言えば、決闘中、まだ魔力カウンターが残つてるときに『サイバー・ブレイダー』の効果を変えて魔力カウンターを0にした所があったけど、あれはいいの？」

蒼影「問題ないです。『魔法都市エンデュミオン』も『マジカル・コンダクター』も効果を使ったあとなので全然問題ありません。そこで魔力カウンターを惜しむより、鳳雅がやったようにアーカナイトを出して、『サイバー・ブレイダー』を破壊した方がお得です」

マナ「ふ〜ん…最後、鳳雅のあれはネタ？」

蒼影「ネタですね…そろそろタグに『東方』を入れた方がいい気がしてきた…」

マナ「今回はこれくらいかな？次回はどうなるの？」

蒼影「…とりあえず、決闘後の会話だな…後は決まってるので追々考えます」

マナ「この小説では皆さんからの感想、ご指摘、精霊のアイデアを募集しています！」

蒼影「さらにこういうデツキを使ってほしいなどの意見も募集しています。興味を持った方は遠慮なく感想に書いてください」

マナ「それではみなさん、なにかいい事あったらいいね♪お相手は

ブラックマジシャンガールのマナと…」

蒼影「作者の蒼影でした」

ターン?...じゃないターン9...これが再会ってやつ? (前書き)

蒼影「ようやく更新...」

凰雅「何故遅れた?」

蒼影「理由はあとがきで話す...それではどうぞ」

ターン?...じゃないターン9...これが再会ってやつ？

＼凰雅 side＼

明日香との決闘を終え、野次馬も帰って行った

「まさか、オーバーキルされるなんて思わなかったわ...」

「ここ最近オーバーキルしてなかったからな...いいストレス解消になった」

「私でストレスを発散しないで!？」

「夜中に俺を呼び出しておいて何を言う?」

「私は十代を呼び出したのよ!」

「ま、まあ二人とも...落ち着いて」

「「やかましい(わ)!!」」

「……はい（泣）」

三沢が地面につずくまっってしまったので俺と明日香は口論を止めた

「ああ、悪い三沢」

「いいんだ、気にしないでくれ……」

俺は三沢に声かけるが、未だに三沢はテンションが低い

「ね、ねえ凰雅！良かったらでいいのだけど…私のデッキ見てくれないかしら？」

この空気に耐えかねた明日香が話題を変えるために俺にデッキ診断を申し出た

「良いのか？俺がデッキを見ても？」

「構わないわ、まだ3回しか凰雅の決闘を見ていないけど、少なくともいい加減なデッキの組み方はしていなかったわ…悔しいけど」

「わかった…けど今度にしてくれないか？正直眠い。まさか連続で決闘は精神的にきつい…三沢も悪いけどシンクロ云々についての説明も今度でいいか？」

「わかった」

俺はその後すぐ自分の部屋に戻った

・
・
・
・
・

・
・
・

・
・

・

（明日香 side）

「まさか、明日香さんが負けるなんて思っても見ませんでしたわ…」

凰雅が帰った後、ももえが私に声をかけてきた

「全くよ！きつとあいつ、イカサマしたに決まってるわ！」

ジュンコはそう言っているが、鳳雅のあれはイカサマではなかったわ…

反則みたいな効果のカードが多かったけど…

「ジュンコ、鳳雅はイカサマなんかしていないわ…言いがかりはやめなさい」

「うう…」

ジュンコは悔しそうね…そんなに鳳雅のことが気に入らないの？

「あ！ここにいた〜！」

突然私は声をかけられた

声の方を向くと見知った子だった

「あら、どうしたの？あなたがレッド寮に来るなんて」

「だって、幼馴染の居場所がわかったんだよ、来ないわけがないじゃない！明日香もひどいよ！昨日女子寮に来たって

いうじゃない!？」

その子は矢継ぎ早に私に言ってくる

相変わらずね…

「で?どこ行つたの?私の幼馴染は…」

「ついさっき自分の部屋に戻っていたわ」

「え〜!?!?そうなの!?!?こうしちゃいられないわ!じゃあね!明日香!」

そう言うな否やその子はレッド寮へ走って行った

「待っててね〜凰雅〜!!」

.....

・
・
・

・
・

・

く 凰雅 side く

部屋に帰るとカオスだった

「あ！お兄ちゃん！ねえ、この人だれ？」

帰ってきて早々、メイがとある人物を指さして俺にそう聞いた

そこにいたのは白い法衣を着た女性…アーカナイト・マジシャンだった

「……………何でいる？」

俺はアーカナイトマジシャンに声をかけた

「あ、どうもくアーカナイトマジシャンのサレスです。よろしくお願ひしますく」

「はあ…どうも…」

なんというかもものすごくマイペースな感じの人だった

まあ、真面目そうな感じがするし、マハードと同じくストッパー役になってくれると俺個人としてはうれしいな…（俺の気苦労も減るし…）

と思っていると……

ドンドン！ドンドン！

突然ドアが連打された

「？だれだ？」

ドアが叩かれる音を聞いて精霊のみんなは姿を消した

俺はいつまでも連打されているドアを開けた

「や！久しぶりね！凰雅！！」

ドアの前に立っていたのは方より少し伸ばした黒い髪をポニーテールにした女の子だった

「……何でここにいるんだ？」

「私もデュエリストよ？アカデミアにいても不思議じゃないじゃない……それより久々にあった幼馴染に何か言うことは無いの？」

そいつは腰に手を当て、いかにも怒っています的な顔でそう言ってきた

「はあ……久しぶりだな、早乙女リン……」

俺は幼馴染のリンにそう言った

ターン?...じゃないターン9...これが再会ってやつ?(後書き)

蒼影「いかがだったでしょうか？」

凰雅「短い」

蒼影「一言で終わったorz」

メイ「よしよし」

凰雅「小さな女の子に慰められる作者...警察に電話してもいいか？」

蒼影「俺何も悪いことしてないよ!？」

メイ「感想のお礼だよ!竜王&竜姫さま!この世全ての悪さま!感想ありがとう!」

凰雅「で?遅れた理由は？」

蒼影「アーカナイトマジシャンことサレスと最後に出てきた早乙女リンのことだよ」

凰雅「早乙女...ということとは...」

蒼影「早乙女レイの姉になります」

メイ「サレスについて困った事って何？」

蒼影「マスパ撃ったから魔理沙でいくかと思っていたんだけど、峠陸哉さまからサレスのアイデアを貰っていたからどっちで行こうか悩んでいたんだよね」

凰雅「結局、アイデアの方を採用したと？」

蒼影「魔理沙を期待していた方ごめんなさい」

メイ「ここでいつものお知らせだよ！みんなにお兄ちゃんの元に来る精霊を募集…この作品の感想のところに応募する精霊のなまえ、マナお姉ちゃんやマハードさんのようにカード名ではない名前（↑これはお好みで）、性格を書いて送って来てね……待ってま〜す」

凰雅「それでは…何かいいことあったらいいな…お相手は凰雅と」

蒼影「蒼影と…」

メイ「めいでした〜〜！」

ターン10・・・幼馴染と再会って奴？（前書き）

蒼影「ようやく出来たぜ！」

凰雅「遅かったな…そのうえ短いな」

蒼影「サーセン」

凰雅「ふざけてると焼き土下座な？」

蒼影「すみません私が悪かったです。私はノロマなブタ野郎です」

凰雅「こんな作者は放って置いて、それではどうぞ」

ターン10・・・幼馴染と再会って奴？

＼凰雅side＼

早乙女リン…原作キャラ、早乙女レイの姉。

本来レイには姉は存在しない、しかし、俺がこの世界に来た影響がこうしてリンがいる

しかも、俺の影響はそれだけに留まらず、なんと如月家と早乙女家がお隣同士だった

おかげで俺とリン、そしてレイは幼馴染として過ごしてきたのだ

「ひつどゝゝい！せつかく再開した幼馴染をフルネームなの！？」

俺がリンをフルネームで呼ぶとリンは頬を膨らませ、俺に近寄ってきた

「悪かったよ、リン…久しぶりだな」

「うん！久しぶり！凰雅！」

そう言ってリンは満面の笑顔で俺に抱きついてきた

昔からこいつはよく俺に抱きついてくる…本人曰く癖だそうだ

「というか抱き着くな」

「いいじゃん！昔からやってることだし」

「ところで、何でリンはここへ来たんだ？」

「さつきも言っただけど、鳳雅に会いに来たんだよ！半年くらい前に突然いなくなつて！まさか特別推薦状のためにあつちこつちのデュエル大会に出ていたなんて知らなかったよ！何で言ってくれなかったの！？」

リンの言つと通り、俺はアカデミアの校長から特別推薦状を貰う為に半年ほど前から全国各地のデュエル大会に出場していた

いやゝアカデミアに向かう直前の宿泊先のホテルでいきなり大量のカードの入ったケースとユベルたちに会ったのは本当に驚いたよ…マジで…

しかし、俺はリンの言つたセリフに違和感を覚えた

「？俺のことは妹に説明するように言つたはずだが？」

「そうだったの！？あの子そんなこと全然言っ
てなかったよ！？」

「忘れてたんだろ？今更なことじゃん……」

俺がヤレヤレといった感じのポーズで言うと…

「だったら最初から私に直接言え！」

「サーセン」

リンに怒られました

・
・
・
・
・
・

・
・
・

・
・

・

リンが髪の毛が逆立つのではないかと言わんばかりに怒っていたの

で落ち着くまで待つこと五分…

ようやくリンの機嫌が元に戻りました

「まったく…今度埋め合わせしてもらっからね！」

「わかったよ…レイは元気か？」

レイとはリンの妹で今小学5年生だ

因みに原作では『恋する乙女』のデッキを使っていたが、俺が関わったおかげでGXの世界ではレベルの高いガチデッキになってしまった…

小学校ではトップクラスの実力なはずだ…

ただ、小さいころからリンと一緒に面倒を見ていたからか、リンと一緒に抱きついてくる位まで懐かれてしまった…

まあ…小学生だし、俺にとっては二人目の妹みたいな認識だから邪な気持ちなんて無いんだけど…

「鳳雅がいなくなつて2日位は泣いてたわよ？3日目からは元に戻つたけど…」

「多分なんだけどさ…うちの妹、レイには事情説明したんじゃないのか？」

「は？じゃあ何で私には説明ないのよ！？」

リンが驚いた顔で俺に詰め寄ってきた

「多分…妹がレイに説明↓妹はレイがリンに説明するだろうと思っ
てリンには説明しなかった↓レイは説明を聞いてテンションが上が
ってリンに説明することが頭から抜けた↓いつの間にかレイも妹も
リンに説明したと思い込んで改めて説明しなかった……てことじゃ
ないのか？」

「なんでだろう…あの二人ならありえそうだわ」

妹もレイも稀に天然入るからなあ……

「そつえば、うちの妹はどうだ？変わったことはあったか？」

「ゆまちゃん？そつえばデュエルアカデミアの試験に向けて勉強
するって言ってたわ…よく考えれば鳳雅が居ると知っていたから勉
強していたのね…今思えば急に勉強を始めた理由がわかったわ……」

如月遊馬^{きつひづ ゆま}……俺の妹…見た目や性格は俺が前世でやっていた遊戯王のゲームで登場する宮田ゆまその人である

デッキもこの世界では使いが少ないE・HEROデッキ…当然俺の影響でかなりガチデッキになったが…

俺もガチ寄りのデッキじゃないと負ける……

「そうか…元気みたいだな…」

「そついえば凰雅」

俺が感慨に耽っているとリンが俺に話しかけてきた

「なんだ、リン」

「さつきからあそこで私たちを見てる女の子たちって…もしかして精霊？」

「は？」

リンが指さしたところを見るとレミリア^{レミリア・メイ・クウリイ}達精霊幼女組がジイーとこ

つちを見ていた…

てか何でリン精霊見えんの？

「見えるも何も私にも精霊居るわよ？」

「心を読むな…っているの！？」

多分ここ最近で一番の驚きだよ！

「今度の月一試験のときに会わせてあげるよ」

月一試験…というかこの世界の月一試験は月の第二週目にやるんだ
よな…

「そうかい…」

「じゃね、鳳雅♪」

リンは笑顔でそう言って部屋を出て行った……

月一試験…どのデッキで行こう…

そんなことを考えながら俺はリンが開けっ放しにしたドアを閉めた

ターン10・・・幼馴染と再会って奴？（後書き）

鳳雅「一人だけ説明されてなかったリン涙目」

蒼影「名前しか出てこなかったけどオリキャラ？も出たね」

マハード「作者殿が出したのでは？」

鳳雅「宮田ゆまって？」

鳳雅「タッグフォース4くらいから出てくるオリキャラでE・H E
ROデッキを使う人、わかる人はわかる」

マハード「そうですか…それでは感想のお礼に入りましょう」

蒼影「アーカナイト・マジシャン/バスターを使うCO2さま、G
MSさま、感想ありがとうございます！」

鳳雅「次回はどうするんだ？」

蒼影「月一試験の様子を描こうかと…」

マハード「使うデッキはどうなさるので？」

蒼影「シンクロを使うか使わないかで悩んでる」

鳳雅「無しでいいんじゃないか？最近、シンクロ結構使ってるし」

蒼影「ま、有りでも無しでも対戦者涙目なんだけどね」

マハード「酷いですね…」

蒼影「デュエルとは非常なものなんだよ…ライロの天使デッキを使おうとした瞬間対戦者がA・O・Jデッキに代えてくるなんてざらだよ？」

鳳雅「公式じゃ大戦直前にデッキ変えるの話だけだな？」

蒼影「俺、公式の大会でないし…」

マハード「ここでいつものお知らせです。皆様に鳳雅殿の元に来る精霊を募集します。この作品の感想のところに応募する精霊の名前、マナや私のようにカード名ではない名前（↑これは個人の自由で構いません）、性格を書いて送って来てください…待ってます」

鳳雅「それでは今回はこの辺で、何かいいことあったらいいよな？お相手は如月鳳雅と…」

蒼影「作者の蒼影と…」

マハード「ブラックマジシャンのマハードでした」

ターン10'5・・・出番が欲しいって奴？（前書き）

蒼影「最近ユベルたちが空気だったので書きました」

ターン10'5・・・出番が欲しいって奴？

（鳳雅 side）

「最近僕たちが空気になってきたと思うんだ…そう思わないかい？
鳳雅」

リンが帰ってから俺は机代わりの卓袱台に教科書とノートを広げ、
月一テストへ向けての勉強を開始した

いま俺が開いているのは現代国語の教科書…

原作では特に描写されていなかったが、デュエルアカデミアにも普通
の高校と同じように現国や数学などの普通科目が存在する

…錬金術など大学に行ったって存在しない科目も存在するが…ただ、
アカデミアはデュエルモンスターズ関係に重きを置かれているので、
内容のレベルはそこまで高くない…

で、いざ勉強を始めようとし時にユベルから声をかけられたのである

「何言ってるんだ？ユベル…」

「レミリアたちが来てから僕たちの出番が減ったのは周知の事実、

だからこうして凰雅に言ってるじゃないか」

「出番言っな…確かに…言われてみればそんな気がしないでもない」

俺がそんなことを言うとなすまでもがやってきて

「だよな！だからさあ、出番頂戴！」

「だから、出番言っな。…具体的にはどうすんだよ？」

「私とお師匠様を入れたデッキか、ユベルを入れたデッキか、エリアちゃんを入れたデッキを今度の試験の実技に使ってほしい！」

なるほど…そういうことか…まあ確かにユベルたちよりレミリアたちの方が最近目立っていたが…それにサレスもやってきたしなあ…

「ちなみに…」

「ん？」

「凰雅は選ばなかった人の言うことを一つ聞いてもらうから」

とんでもないこと言いやがった…ということは、3人のうち選ばなかった2人の要望を聞かなきゃいけないってことだよな…

「待てコラ」

「マスタ…」

おお！エリア！お前は俺の味方だよな？そうだよな？

「マナかユベルを選んであげて…私はマスタにお願いを聞いてもらうだけでいい…」

俺に味方なんていなかった…

「……因みにお前らのお願いとやらを聞いておこうか？」

俺がそう聞くとマナがとってもいい笑顔で

「アップルパイとシフォンケーキ！！」

こいつが花より団子な性格でよかった…マジでよかった

「ユベルは？」

「僕とベツトイ…」

「マハード、サレス。部屋にあるゲーム類全部実家に送るから箱詰め手伝って」

この馬鹿なんてこと言おうとしやがる！

「冗談です。やめてください」

見事な土下座だった…あいつ最近ゲームに嵌りすぎだろ…

「お前もマナと同じでいいな？」

「いや…僕は…」

「い・い・な？」

「はい！問題ありません！」

「よし…エリアは？」

残りはエリア…まあエリアはいい子だからユベルみたいな無茶ぶり
はしてこないだろう…

「んと…一緒に…お風呂…」

「お前たちはどうしてそういうのばかりなんだ！？」

R指定がついたらどうする！？

「あ、お師匠様は何かありますか？」

そこでマハードに振るのかよ……

「いえ、私は特に…強いて言うのなら最近包丁の切れ味が落ちてきて
いるので砥石が欲しいです」

大人だ…大人がいる

「まあ…どのデッキを使うかは考えておくから…」

そう言って俺は再び教科書と向き合った

ターン10、5・・・出番が欲しいって奴？（後書き）

凰雅「あいつら暴走しすぎだろ…」

サレス「みなさん元気ですねぇ」

凰雅「サレスのその樂觀さが羨ましいと思ってしまった…じゃあ、感想のお礼から」

サレス「毎日がダルい男さま感想ありがとうございます」

凰雅「月一試験は次回に回すそうです」

サレス「そうみたいですねぇ」凰雅さんはどのデッキを使うんですか？」

凰雅「ぶつちゃけどでもいいと思ってる」

サレス「そうですかぁ」

凰雅「じゃあ今回はこれくらいで」

サレス「じゃあ、何か良いことあったらいいですねえ？」お相手はサレスと」

凰雅「凰雅でした」

ターン11・・・これが月一試験ってやつ？（筆記編）（前書き）

蒼影「ようやく書きあがったぜえ〜」！

ターン11・・・これが月一試験ってやつ？（筆記編）

（鳳雅side）

週が明け、月一試験が始まった

ここで、月一試験の内容を簡単に説明しよう

試験は一週間を全て使って行われる。俺が在籍している一年生の日程は……

月曜…一時限目、現国。二時限目、古典。三時限目、政治・経済（政治・経済は選択した生徒のみ）

火曜…一時限目、数学。二時限目、英語。三時限目、倫理（倫理は選択した生徒のみ）

水曜…一時限目、科学。二時限目、現代社会。三時限目、錬金術（錬金術は選択した生徒のみ）

木曜…一時限目、世界史。二時限目、保健体育。三時限目、地学（地学は選択した生徒のみ）

金曜…一時限目、二時限目、デュエルモンスターズ・筆記（一年生）。三時限目、四時限目、デュエルモンスターズ・筆記（二年生）。五時限目、六時限目、デュエルモンスターズ・筆記（三年生）

土曜…再試験（追試験は体調不良などで試験を受けられなかった又は、試験途中で退席したもののみ受験可能。違反行為をした者は受験不可）

となっている。普通教科の試験は小テスト形式で簡単にいえば毎月の復習のようだが、デュエルモンスターズ関係の試験は丸1日

使うくらい気合が入ってるようだ。

ちなみにデュエル実技は一年生は五〜六時限、二年生は一〜二時限、三年生は三〜四時限目に行うそうだ。これが毎月行われるのだ

でもって、アカデミアでも普通の高校と同じ期末、中間、学期末テストがあり、その日程は…日程内容こそ同じだが試験は試験だ、気が滅入る

選択科目は錬金術は任意、政治・経済、倫理、地学は三つの中から一つ選択しなければならない

俺が選んだのは錬金術と地学だ

しかし、いくら二週間前から範囲を通知していたとしても毎月試験勉強というのは気が滅入る

本当に気が滅入る…大事なことなので三回言いました

で、現在金曜の朝7時45分…試験開始まであと15分だ

しかし、十代がまだ来ていない…

（あいつ…遅刻か？昨日結構早い時間から寝てたよな？様子見に行ったら爆睡してたし…翔^{アホ}はなんか揉んでたし…）

そんなことを考えながら、最後の復習をしていると試験官をしている大徳寺先生が入ってきた

「それでは試験を始めるにや、余計なものはしまってください」

相変わらず訳のわからん語尾だな…何？萌でも狙ってたの？

クロノス教諭の口調も訳分らんし…まあいいか

次々と問題用紙が配られていってるが、十代はまだ現れない

そしてついに試験が始まってしまった

まあいいか、どうせ主人公ばわあでなんとかなるに違いない

試験に集中しよう

問1

・モンスターのフレームの種類を全て答えよ

ふむ、まあ基本だしな…

答えは…通常モンスター、効果モンスター、融合モンスター、儀式モンスター…シンクロやエクシーズはこの時代のものじゃないから除外つと

次は…

問2

・問1で答えたフレームのモンスターの名前を一つずつ答えよ

めんどくせえ…答えは…

通常モンスター…ブラックマジシャン。効果モンスター、ブラックマジシャンガール。融合モンスター、E・HEROフレイムウィングマン。儀式モンスター、カオスソルジャーつと…

次…はつと…リンたちはどうだろうか、ちゃんとできてんのか？

…

…

…

・
～リンside～

私が座っている席より少し前のほうで鳳雅が問題を解いていた

リ～ン～！退屈だよ～！

私の背後でそんな声が聞こえた

私の背後でふわふわと浮いて退屈そうな顔で私を見つめる私の精霊だ

テストが終わるまで待っててね？

それまで私は何をしていればいいのよ！

この子…根はいい子なんだけど、退屈や暇が大嫌いな性格しているのよね……

この子には悪いけど、今はテストに集中しよう……

問5

・罨カードの種類をすべて答えよ

まだ最初のほうの問題だし、簡単ね…

答えは通常罨、永続罨、カウンター罨の3種類ね

問6

・問5で答えた罨カードの種類のカード名を1つずつ答えよ

…さっきからカードの名称書くのばかりね…

簡単なんだけど面倒なのよねえ…

えっと、通常罨…『奈落の落とし穴』、永続罨…『拷問車輪』、力
ウンター罨…『神の宣告』…と…

この調子でサクサク解いていこう！

でも、鳳雅の後ろで言い争ってるあの3人の精霊が気になって仕方
ないんだけど……

りゅんああの精霊のほうに行ってきたいい？

ややこしくなるから駄目

うが~~~~!!退屈で死にそうだよ~~~~!

……最後まで集中力もつかなあ

・
・
・
・
・
・

・
・
・

・
・

・

く鳳雅 side

問10はこんなもんだろう……なんでいきなり文章問題なんだよ……

このアカデミアでフリーチェーン説明できるやつ何人いるんだよ……

え……と次の問題は……だから、今回のデュエルはユベルに譲るって言ってるじゃない!……

今、俺の後ろはカオスとなっている

人がテストをやっている後ろでマナ、エリア、ユベルが言い争っているからだ

ユベルはまだ一回もデュエル使ってもらってないでしょ？だから譲ってあげるから！

それを言うならマナだってまだじゃないか、譲ってあげるからさ……
エリアはどうだい？ 凰雅と一緒にデュエルしたいだろう？

私は一回使ってもらってるからいい……二人に譲る

………

一旦の沈黙……そして……

凰雅！

………マスタ……

一斉に俺の前に来て一斉にそう言った

全員をお願い聞いてやるから静かにしてろ

は〜い！

元気のいい返事だった

問題が20問を超え問題形式が詰めデュエルになったあたりで十代が教室に入ってきた

試験残り時間30分切ってるけど大丈夫なのか？

まあ十代だから大丈夫な気はするけど……

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

・
・

・

筆記試験が終わり、実技が始まるまでの間、各自自由となった

ただし、筆記試験を行っている会場には近づいてはいけないなど細かい制限こそあるが自由時間である

大抵の生徒はデッキの調整などで自室に戻る生徒、早めの昼食をとる生徒が大半だった

俺は購買近くの談話スペースで試験で使うデッキの確認をしていた

凰雅、結局今回はだれのデッキなの？

マナが俺の後ろからデッキを覗き込みながらそう言った

相手による

俺は一言そう答えた

今になって思い出したが、今回はおそらくクロノス教諭が手をまわしてカードパックを買い占めたり対戦相手を操作したりと裏

で手を回すはずだ

テストというだけあって評価しやすいように教師側は対戦者同士の实力がある程度拮抗するように対戦カードを組む必要がある

そのためオシリスレッドの生徒の相手はオシリスレッド…オベリスブルーの生徒の相手はオベリスブルーといった感じで同

じ寮の生徒同士で対戦カードを組むのが通例らしい

しかし、原作でクロノス教諭は気に食わない十代を退学させるため対戦カードを教諭という立場を利用して弄り、ブルー生徒の万丈目と対戦するようにしたのだ

俺自身クロノス教諭に目をつけられるようなことはしていないが、入学試験で筆記第8位なのにオシリスレッドにいる俺に何か

してこないという保証もないので対戦相手が確定するまでどのデッキを使うかは決めていない

そんな感じでデッキを調整していたら明日香がこっちにやってきた珍しくオプシヨンのように一緒にいるジュンコとももえの二人はいないようだ

「凰雅、今いいかしら？」

「なんだ？」

明日香は俺の対面の席に座った

「この前言っていたデッキ診断、今できるかしら……」

「いいぞ」

「そうよね…テスト前なのに図々しいわよね………っていいの!？」

珍しい明日香のノリ突っ込みを見てしまった

「実技試験まで実際昼休みも含めても2時間以上もあるんだ、問題ないだろう?」

「そうね…」

「んじゃ、レッド寮行くぞ」

「は?どうして?」

立ち上がっていった俺に明日香は呆気に取られたいような顔で俺に聞いてきた

「この際だからデツキ弄ることも考えておこうと思って、カードは俺の部屋にあるから寮に戻らないといけないし」

「…………そう…（え？デッキを弄るって私のデッキを？あれ？デッキ診断頼んだの失敗？）」

マナ、ユベル先に戻ってメイたちが実体化していないか見て来てくれ、実体化していたら精霊化させておいて

わかった！

任せておきなよ、鳳雅

ユベルとマナはそう言って寮のほうへ飛んで行った

ターン11・・・これが月一試験ってやつ？（筆記編）（後書き）

蒼影「竜王&竜姫様、レヴァティン様！感想ありがとうございます！」

蒼影「今回は本編で使った筆記試験の問題を載せます。是非解いてみてください」

蒼影「問題数は全部で20問です。本編ではこの後10問の詰めデユエルがある形になっています」

蒼影「マスターズルールなどはGXの時代を基準です」

月一試験問題

問1：モンスターのフレームの種類をすべてこたえよ

問2：問1で答えたフレームのモンスターの名前を一つずつ答えよ

問3：魔法カードの種類をすべて答えよ

問4：問3で答えた魔法カードの種類のカード名を一つずつ答えよ

問5：罾カードの種類をすべて答えよ

問6：問5で答えた罾カードの種類のカード名を一つずつ答えよ

問7：モンスターの生贄が必要になるレベルはいくつからか答えよ。
又、レベルごとに必要になる生贄の数を答えよ

問8：生贄が3体必要なモンスターを3つ以上答えよ

問9：次の5枚のカードを正しいスペルスピードの順に並び替えよ
神の宣告・サイクロン・光の護封剣・威嚇する咆哮・メタモル
ポッド

問10：リクルーターとは何か簡単に説明せよ。又、モンスター名
を1つ答えよ

問11：フリーチエーンとは何か簡単に説明せよ。又、カード名を
2つ以上答えよ

問12：裁きの龍が召喚時、効果を起動した際、奈落の落とし穴を
発動した場合、裁きの龍の効果はどうなるか答えよ

問13：融合素材が3体以上記述されているモンスターを2体以上
答えよ

問14：攻撃力が？と記されているモンスターを3体答えよ

問15：守備力が？と記されているモンスターを3体答えよ。ただ
し、問14で答えたモンスターは回答不可

問16：サイコロを振ってライフポイントにダメージを与えるカー
ドを2枚答えよ

問17：特殊勝利のカードを答えよ

問18…融合素材が三体以上必要なモンスターを3つ答えよ

問19…モンスターの属性を全て答えよ

問20…モンスターの召喚方法を全て答えよ

蒼影「感想、ご指摘お待ちしています！」

蒼影「では、何かいいことあればいいですね？お相手は作者の蒼影がお送りしました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9360p/>

遊戯王GX 強制転生日記

2011年12月16日18時06分発行